

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：日本一を生かしたまちづくり



2001・2

特集

日本一を生かしたまちづくり

目次

特異な経営センスで輝くまちに 川瀬光一(まちづくり学会代表理事).....	4
広域提携のシンボルが「天」の火文字 金田典子(北海道名寄市産業振興課主査).....	8
存在感乏しかった町が菜の花で「開花」 田浦良次(青森県横浜町企画課主事).....	10
こいのぼり製作で芽生えた参加意識 斎藤重雄(埼玉県加須市企画課係長).....	12
28年間続く人気の「まつたけ観光」 片桐明(長野県豊丘村交流センター所長).....	14
山村留学とみんなの森大学 伊藤秀雄(愛知県富山村教育委員会教育主査).....	16
梅と健康を抱き合わせた村づくり 山田五良(和歌山県南部川村長).....	18
「愛の鐘」鳴らし、カッブル620組が誕生 小守克則(岡山県東栗倉村企画室主幹).....	20
村おこしに滝写真集、全国から反響 増井英子(徳島県木沢村産業企画課主事).....	28
高地に一周3kmの天然芝コース 森淳史(大分県久住町社会教育課主事).....	30
「元気で存在感のある山口県づくり」を目指して 二井関成(山口県知事).....	3
雲仙・普賢岳噴火災害から10年 鐘ヶ江管一(前島原市長).....	22
アメリカに学ぼう 松田美夜子(生活環境評論家).....	27
わがまちづくり支援事業の創設について 下 総務省自治行政局自治政策課.....	32
環太平洋地域における地域づくり調査研究.....	35
奇跡の成長、五年間で売り上げ三倍に 福島隆次(南七城町特産品センター/メロンドーム支配人).....	36
市町村実務研修リポート(上).....	38
平成がかりカーニバル実行委員会・山梨県韭崎町.....	40
蓬田商工会女性部・青森県蓬田村.....	42
熱気溢れた小さな全国フォーラム 柴順三郎(静岡県知事).....	44
地域だより/センター通信.....	45
日本一を生かしたまちづくり.....	47
都道府県漫遊/手前みそですが.....	48

●西米良の夜神楽

徹夜で神々の舞を奉納する宮崎県西米良村の夜神楽が昨年十二月八日夜から九日朝にかけて同村の児原稻荷神社で行われ、全三十三番の舞が披露された。

九州山脈の山ぶところに抱かれた西米良村は、椎茸、ゆず、猪肉の産地としても知られ、村内を流



れる清流「ツツ瀬川」では、ヤマメ、鮎が獲れ、渓流釣りファンを魅了している。

養老一年(七二八)に始まったと伝えられ、古い伝統を誇る夜神楽は、五穀豊穡、家内安全、大漁、商売繁盛を祈って催される同神社大祭の一環として奉納されている。

夜神楽は八日午後七時ごろから始まり、舞うのは、サラリーマン、日ごろ農作業や山仕事をしている男性ら二十数人。宮司が舞う白稲荷や、赤稲荷など三十三番全部の舞が終わったのは翌朝の午前七時ごろ。このロングランにもかかわらず隣の鹿兒島、熊本、福岡の各県からも大勢の参拝客が訪れた。

●ペンリなべ ●カメラ ●松岡勉

グローバル化した社会の中で、世界一を競うのならまだしも、
「今さら日本一でもあるまい」と言われそうだが、そうは言っても
日本一の座を射止め、それを維持していくのは、並大抵ではない。
まちづくりに、この「日本一」を活用し、成功している所は多いが、
その裏で大変な苦労もある。今回は、そんな事例を紹介してみたい。

日本一 をどう生かす まちづくりに

●日本一を生み出したまちづくり

●日本一の菜の花畑＝青森県横浜町
半農半漁の町に200haの菜の花畑。東京ドームの46
個分。初夏のシーズンにはイベントが催される。

●雪質日本一＝北海道名寄市

さらさらした良質の積雪の空気に
3000本のローソクがともされる
名寄短大公園のスノーランタン。
背後の太陽の丘には火文字が輝く。



●こいのぼり日本一＝埼玉県加須市

年間7、80万本。国内シェアの
50%というこいのぼり生産量。
市民有志により全長111kmの
世界一ジャンボこいのぼりが作られる。





●梅の生産日本一＝和歌山県南部川（みなべがわ）村
「一目100万、香り10里」といわれる梅の里。村役場には「うめ課」、そして「うめ研究センター」も。南高梅のブランドはあまりにも有名。



●滝の数日本一＝徳島県木沢村
山林が97%を占める小さな村に、大小100以上の滝があり、写真集もつくった。温泉と抱き合わせて滝めぐりコースも検討中。



●日本一のマラソン練習コース＝大分県久住町
夏も涼しい久住高原に、天然芝の一周3kmのマラソン練習コースができ、大会も開催。全国からアスリートたちが集まってくる。



●日本一の愛の鐘＝岡山県東栗倉村
凱旋門を思わせる鐘楼にある愛の鐘リユバン・ペール。村のシンボルでもある。620組のカップルが、ここで新婚生活のスタートを切った。



●日本一小さな村＝愛知県富山村
過疎からの脱皮を目指して都会からの山村留学を実施中。子供たちは共同生活をしながら、そばや野菜作りに精を出す。



●良質マツタケが日本一＝長野県豊丘村
味覚の王様マツタケは香りがいいのち、市場から香り、味日本一と評価され、「まつたけ観光」は好評。農家の副業として定着している。



二井 関成

山口県知事

「元気で存在感のある 山口県づくり」を目指して

激動の二十世紀が終わりを告げ、新世紀が幕を開けましたが、国際化、高度情報化の進展、少子・高齢化の進行など、社会経済環境が大きく変化している今日、地方は、こうした時代の変化や要請に的確に対応するとともに、本格的な地方分権の時代にふさわしい独自の取り組みを進め、地域の振興・発展に努めていかなければなりません。

このため、私は、二十一世紀初頭を展望した本県の新しい県づくりの指針、「やまぐち未来デザイン21」に掲げる、さまざまな構想やプロジェクトを積極的に推進するとともに、「元気のくに山口」の創造に向けた二つの「大きな舞台」を活用し、本県を全国に誇れる「存在感」のある県にしていきたいと考えています。

一つの舞台は、今年七月十四日から九月末日にかけて、「いのち燦めく未来へ」をテーマに、山口宇部空港や新幹線小郡駅から車で十分程度の阿知須町（あじすまち）から浜で開催するジャパン・エキスポ「山口きら博」です。この博覧会を通じて、全国の皆さんに本県の素晴らしさを知っていただくことはもとより、県民の皆さんの博覧会への自主的・主体的な参画を通じて、県内各地域に蓄積された知恵やノウハウを、これからの新しい県づくりに生かしていきたいと思っています。

もう一つの舞台は、同じく七月から運用開始する「やまぐち情報スーパーネットワーク」です。IT革命が急速に進展する中で、本

県が独自に整備を進めてきた高速大容量のデータ通信を可能とする光ファイバー網を、医療・福祉・環境・教育など生活に密着した、さまざまな分野で県民の皆さんに多様に活用をしていただくとともに、ベンチャー企業や大学、研究開発機関へ開放することによりあります。さらに、NTT西日本および山口市に衛星通信所を置いているKDDIの二社の通信網と、スーパーネットワークとをつなぐ接続共同実験を行い、これに参加する県民や企業・団体が、東京や大阪、海外に通常の半額程度のコストで通話できるような取り組みを進めていきます。

このほかにも、本県の持つ特性や獨創性、先駆性を最大限生かした取り組みを進めていきます。一例を挙げますと、今日、環境問題への対応が迫られる中、国内有数のセメントや化学製品の生産県である本県の産業特性を活用して、ごみの焼却灰や廃プラスチックをセメントや化学製品の原料として活用していただくという「ごみゼロ社会づくり」です。企業が独自にこうした取り組みを進めている例はあるようですが、行政と企業とが一体となつて行う全県的な取り組みとしては、画期的な試みとなります。

私は、この二つの「大きな舞台」を積極的に活用するとともに、いわば「山口方式」と呼べる本県の特性を生かした取り組みを進め、新世紀に県民一人ひとりがきらく「元気で存在感のある山口県づくり」に全力でチャレンジしたいと考えています。

日本一

を生かしたまちづくり

まちづくりをプロデュースした

仕掛人



川瀬光一

まちづくり学会代表理事

特異な経営センスで輝くまちに

●成功例と担い手たち

「日本一を生かしたまちづくり」において、最も大事なことは、まちづくり・まちおこしを仕掛けたいわば「都市文化の仕掛け人」が、初めにどのように企画し、実践し、成功へ導いていったか、ということである。

二十一世紀は、地域・まちづくりを仕掛けた人たちがもつとスポットライトを浴びなければならぬということだ。

市民、専門家、行政が協働してまちをつくることが求められている今日、「まちづくりプロデュース」のできるヒトの存在が重要となっている。

ここでは、日本の昭和三十年代以降の地域・まちづくりの成功事例と、その担い手た

ち―まちづくりプロデューサー―の役割を探りつつ、日本一の都市・まちづくり物語のあらましと、仕掛け人ベスト6を述べよう。

日本一のまちづくりと仕掛け人 best 6

① 小樽のまちづくりと 小樽運河保存運動

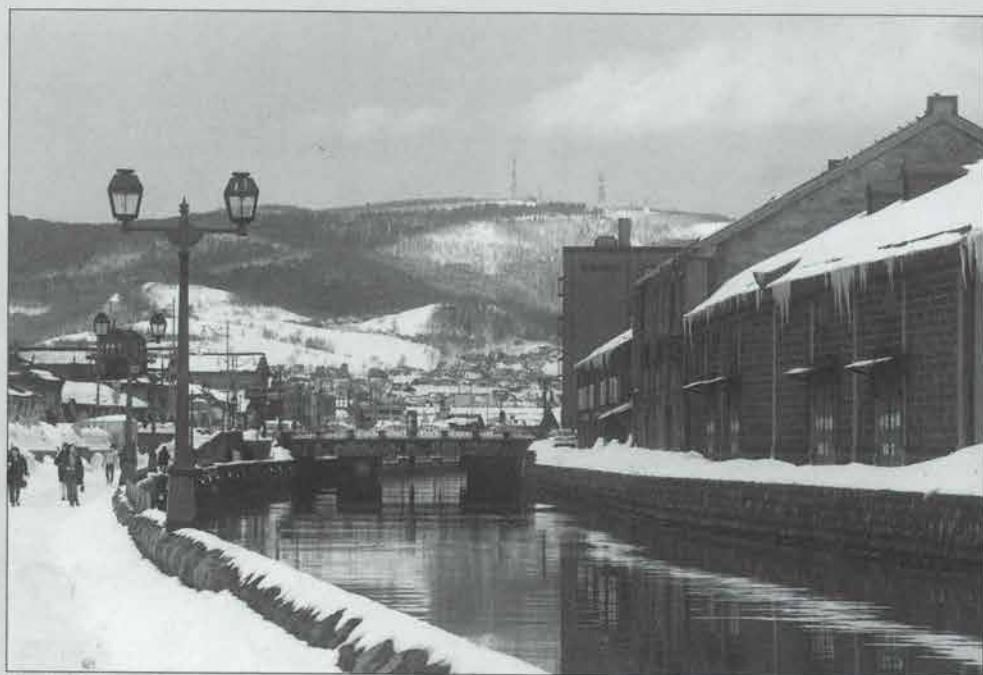
小樽は、今や日本有数の「叙情観光都市」である。商都小樽が札幌の外港として栄え、小樽運河は昭和初期に完成している。昭和四十年に運河を埋め立て、道路建設という行政の決定がなされた。

同四十八年、峰山富美さんを代表とする市民たちによって、「小樽運河を守る会」が十年にわたって全国の世論を沸きたたせた小樽運

河保存運動を始めた。

そこでの視点は、小樽運河の「見世物観光」ではなく、生きた生活のにおいのする観光をもつて、まちづくりに貢献するという提案だった。いずれにしても全国的に小樽運河保存運動は盛り上がり、結局、半分は埋め立てられたが半分は残ったのである。しかし、小樽運河沿いには散策路とガス灯、ポケットギャラリーが整備され、旅情を誘う小樽風景として全国的に定着した。

全国の注目を集めた小樽運河の帰すうと、その後の石原裕次郎会館の建設、個性的なガラス館や名物横丁の出現などによって、小樽は一躍観光客の人気スポットになってしまった。小樽運河を守る会の元会長峰山富美さんは「小樽運河と共に地域に生きる」と今の心



冬の小樽運河

情を述べている。小樽のまちづくり運動のポイントとは、まさにそこにあったのではないだろうか。

② 長浜市「黒壁」によるまちづくりと笹原司朗氏の戦略と挑戦

都市文化の仕掛け人としては、長浜から欧

州ガラスの文化発信をしてまちを再生させたまちづくり会社「黒壁」の笹原司朗氏が有名である。その十余年の歩みは神格化され、全国の有数なまちづくり第三セクターの成功例となっている。長浜の黒壁の場合は、まさに笹原氏とそれを取り巻く仲間たちの異端性と成功への情熱、さらにまちおこし戦略にあったと言っている。黒壁の成功のテーマは、「欧州ガラス」を徹底的に研究し、商品開発と店舗展開に活用した結果にほかならない。

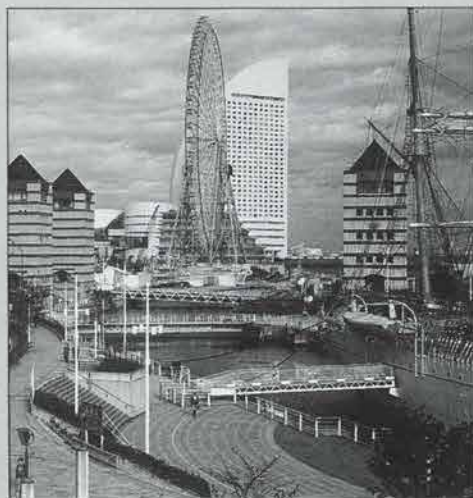
国際性ある欧州ガラスへの挑戦、空き店舗の再生、まちなか商店街活性化のモデル、経営戦略第一主義、まちづくり役場の設置など、まさに創造的革新のまちづくり戦略を実践していることである。異端児の最たるところは、市役

所と商工会議所の逆のことを戦略的に行ったことだ、と笹原氏は言っている。いずれにしてもベンチャー的プロデューサー笹原司朗氏が二十一世紀の都市文化の仕掛け人であることは間違いない。

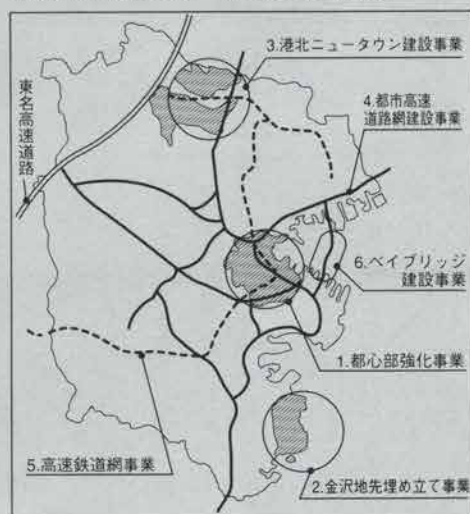
③ 都市「三」ハマをつくらせ飛鳥田一雄、細郷道一両市長

飛鳥田一雄氏は、浜っ子の弁護士で、代議士から横浜市長になった。当時、民間のコンサルタント会社において、いかに都市づくりを行うかの計画に携わったのが田村明氏。同氏の提案した都市づくり計画を、横浜市に入って実行してくれ」と飛鳥田市長に言われ、その後、同市長と田村明コンビが世に言う「横浜方式」——戦略的六大事業プロジェクトとアーバンデザイン・市民参加——を実践、それを結実させるため努力し、今日の基盤を作り上げたのが細郷道一市長である。

主な先進的なまちづくりのいくつかを挙げると、まず横浜の中心部を走る高速道路を地下にもぐらせ、都市を美しくするアーバンデザイン行政を市民と共に進めたこと、タテ割り行政を改め、企画調整という本来の市役所の都市づくり行政のモデルをつくったことなどがある。六大事業は、(1)横浜都心部強化事業(MM21の実現)(2)金沢地先理め立て事業(3)港北ニュータウン建設事業(4)高速道路網建



(上)横浜市みなとみらい21 (下)六大事業・位置図



設事業(5)地下鉄建設事業(6)ベイブリッジ建設事業である。

六大事業の狙いは、(1)今でいう公共投資を少なく、民間資本の導入を図る(2)市が総合プロデュースを行う(3)自治体のセクト主義をやめ、総合調整をする(4)新しい創造と事業方式(5)職員の意識改革と取り組み(6)背水の陣とエネルギーの生み出しなど。まさに戦後の自治体、都市づくり行政、政策のモデルになったのである。

これら手法と都市づくりにかけた実践こそ、日本一なのではないだろうか。

④ 小布施町における街並み形成とリーダーたち

長野県小布施町も、「栗」と「北斎」と「街

並み形成」で広域集客によるまちおこしで有名である。

一九七六年の北斎館開館から始まった小布施のまちづくりは、隣接する高井鴻山記念館周辺の街並み修景事業によって面目を一新した。

この仕掛け人として小布施堂の市村次夫氏や市村良造氏など、まちづくりの独創的なリーダーが知られている。また、建築家の宮本忠長氏が一貫して設計監理をしたことも貢献している。

いずれにしても北斎館をはじめとする公共施設を持つ町と、民間施設の所有者が一体となって街路整備ならびに家並みのデザイン統一などを修景事業として行い、これを契機に

景観関連制度ができ、新しい街並みが拡大したのである。大事な点は、この修景事業を宮本忠長氏のコンサルティング・設計のもとで、江戸時代からの高い文化性を伝承した地区の建築景観を活用したことである。

地元の建築家がまちづくりの過程に終始、責任をもって関与、プロデュースしたことが重要なのである。さらに、「ア・ラ・小布施」によるまちおこしの知恵と、小布施ブランドづくりのソフトの仕掛けも小布施の特長である。

⑤ 蔵とラーメンのまち・喜多方の仕掛け人物語

福島県喜多方市は、ラーメンが有名になる前は、昭和三十年代後半に「蔵の町喜多方」をまちおこしのテーマにして実践したが、あまりパツとしなかった。これを「ラーメン日本一」に変えたのは、当時、市役所の観光課係長であった富山昭次氏が仕掛け人として存在していたからだ。昭和五十年後半に、NHKの人がロケハンに訪れて、富山氏がラーメン屋に連れて行き、何回かもてなし、「ラーメンの町喜多方」をNHKがテレビで数回紹介した。それが契機となって爆発的なラーメンブームが起きた。

さらに、青年会議所が「ラーメン消費量日本一のまち」を宣言した。実際、その数年後、全国のコンプニで「喜多方ラーメン」が日本一の売

上量になっていった。私も昭和五十三年から二代にわたる喜多方市長のまちづくりブレインとしてかわつてきているが、喜多方の場合、ここ数年まちづくりへの取り組みが低下したように感じられ、大変心配している。

⑥ 長崎のハウステンボスをつくった 天才プロデューサー 神近義邦氏

長崎県の佐世保市で、「ハウステンボス」をつくった神近義邦前社長は、二十世紀日本での最大の地域づくりプロデューサーではなからうか。

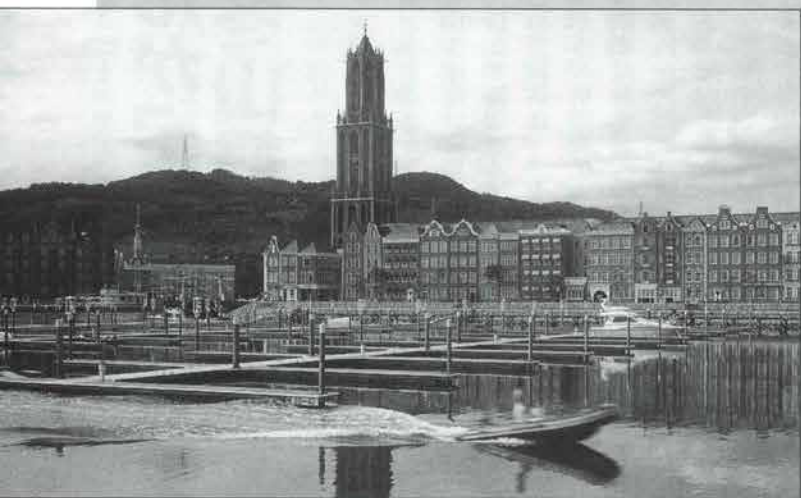
神近さんの素晴らしいのは、学歴もない、お金もない、人脈もない町役場の係長だった。それが一念発起して、東京の料亭に修業に出て、長崎オランダ村をつくり、その後さまざまな夢とロマンを追い求め、ひとり十年かかってトータル一兆円の「千年王国」のプロジェクトを実践した。神近義邦氏を支えた当時の日本興業銀行相談役の中山素平氏や日本設計の池田武邦副社長、高田勇長崎県知事などの全面協力があった。そういう意味では、アメリカのウォルト・ディズニーにも匹敵するような発想とスケールの大きい人だったと思う。

名物首長 best 5

「日本一を生かしたまちづくり」で最も重要な役割を果たすのが首長である。まず、市町

村長と知事が、いの一番にまちづくりと取り組むのがベストである。日本でのまちづくり・まちおこしの名物首長のベスト5を私なりにあげよう。

第一は、北海道池田町の当時の丸谷金保町長。町の活性化のために、地元ワイン（十勝ワイン）を特産品として売り出し、ワイン町長として知られる。一村一品まちおこしの元祖。そのあと参院議員にまでなり、池田町は、その後現在まで官民にわたるワイン文化の情報発信を展開している。



マリーナから見たハウステンボス。中央がドムートルン

第二は、昭和四十年ごろの千葉県松戸市の松本清市長。同市長は市役所に「すぐやる課」をつくった。役所というのはたらい回しするケースが多いが、市役所が市民のどんな相談・苦情にもすぐ行動して処理し、戦後の市役所サービス革命の第一歩を実践した。

第三は、静岡県掛川市長の榛村純一氏である。掛川城再建に当たって、公共事業としてはなく、市民と地元企業のファンドなどによって四十億円を集めて本物の城をつくった名物市長。

第四は、出雲市長だった岩國哲人氏（現衆院議員）。市役所の窓口業務を土・日曜日に駅前で実施した。最初は職員組合が反対したが、市民に喜ばれていわゆる「市役所革命」のシンボルとなった。

第五は、大分県の平松知事。一村一品運動は、いわゆるまちおこし、村おこしの原点となった。最近では、名物首長といえば、東京都の石原慎太郎知事と長野県の田中康夫知事といえる。石原知事の外形標準課税での対応や、職員のベースアップ率引き下げなど、二十一世紀において東京から日本を変えろという基本スタンスは、都民に大きくアピールしている。長野県の田中康夫知事も、マスコミでも大きく取り上げられた。二十一世紀の地方主権の自治体がどうなっていくか注目される。

広域提携のシンボルが「天」の火文字 週末には雪上車で冬山観光も



名寄市産業振興課主査
金田典子

名寄市は、北海道の北部に位置し、東西を山地に囲まれた盆地の中にある。その市街地は南北に貫流する天塩川と、東方から天塩川に合流する名寄川とに囲まれている。

雪像づくり競う―五大陸

先人たちが、この名寄の地に鉄を入れて百年。岐阜や山形の比較的暖かい地方から、この寒冷多雪地方へ入植して来た人びとにとって、冬の戦いが最優先の課題であつたらう。今、私たちは厄介者だった雪と親しみ、それを利用できるようになった。子供たちにとって、白く輝く雪は無限の可能性を持った遊び道具である。雪だるまづくりから雪像製作、さらには芸術活動にまで発展させてきたのが、例年行っているイベント「雪質日本一フェスティバル」である。

名寄市は、気温がマイナス三十度以下になることもあるので、雪質はべとつかず、さらさらして、きめこまかい。いわゆる「パウダースノー」といわれ、それが日本一の雪質といわれるゆえんだ。

十二年度については、名寄市開拓百年協賛事業となることから、その名称を「なよろ国際雪像芸術祭」に変更して、二月十三日から十八日まで開催する。

この芸術祭は、二十一世紀を迎え、新たな北国からの情報発信のイベントと位置付け、「雪像彫刻世界五大陸大会ジャパンカップ」と命名された。これは海外から十四カ国、十五チーム、国内選抜チーム五チームの計二十チームが雪像づくりの技を競い合うものだ。作るのは三層四方の雪柱の彫刻で水を一切使用せず、芸術性を追求したスノーオブジェが、名寄の街全体を美術館に変える。

全道学生対抗スノーオブジェ競技会も同時に開催される。学生にとっては、プロのオブジェ製作は勉強になるので好評。これら芸術性の高いスノーオブジェ競技会の原点は、市民による雪像づくりで、五十年も継続している。「おらの雪像見てくれコンクール」も十年目を迎える。これらは家族や職場の仲間が寒中での作業となるが、そこから一層の団結力が生まれる。入賞と関係なく、楽しみながら

の製作で、年を追うごとに参加チームが増えている。

ドラム缶270本を用意

「雪質日本一なよろのまち」で、独創的な造形美を披露している街を見下ろすかのように、名寄市郊外の太陽の丘に毎年二月、「天」の火文字が現れる。

このイベントは、平成元年二月十八日夜、北の天文字焼きに点火されたのが始まり。その中心となって活躍してきたのが、まちおこし集団の「助っ人」。

道北十四市町村は、広域的な提携によって、地域の活性化を図ろうと「北の星座共和国」をつくり、それに基づいて各市町村に星座名が付けられた。名寄市は「太陽」。火文字の「天」は、これら十四市町村の星座名でつないで描いており、広域的な地域活性化への願いが込められている。火文字の会場が太陽の丘と名付けられているのも、名寄市の星座名にちなんだものだ。

今年はドラム缶を二百七十本用意し、その



太陽の丘で行われる北の天文字焼き。写真前面は名寄市東小学校

ドラム缶の中に市民が持ち寄った古着を詰め、灯油をかけ点火するが、「天」の火文字は縦が二百二十センチ、横が百五十センチの規模となる。点火に参加する市民も二百二十人。市民の間では定着したイベントとなっている。

名寄市は、平成元年度に北海道の戦略プロ

市民参加で幻想の世界

スノーランタンは、硬く締まった積雪を筒状の缶で切り取り、その後の空洞にローソクをとまずと出来上がる。幻想的なスノーランタンの明かりを雪原に約三千個並べると、アイスキャンドルとは、また違った趣のほのかな雪明かりがともし、ファンタジックな世界が生み出される。十三年は、開拓百年記念でもあり、毎年催される名寄短期大学公園のスノーランタン。そこから見渡せる天文字焼き。東小学校の校庭からは軽音楽の演奏が聞こえてくる。製作作業から点火まで市民参加によって運営され、温かいコーヒーマルと、お汁粉がスノーランタンの明かりと共に冷えた身体を暖めてくれる。

雪質日本一のピヤシリスキー場が毎年十二月にオープンする。

ピヤシリスキー場は、初心者から上級者まで多彩なコースがあり、何よりも都会近郊のスキー場と違い、リフト待ちがほとんどない。スキー場近くには、リフトを備えた七十級ジャンプ台があり、シーズン開幕のトップを切って全日本ジャンプ大会が開催されることでも有名である。

今年三月には世界のジャンパーたちが集い、ワールドカップ・コンバインド競技会が開催される。そのほか、あまり知られていないが、

ピヤシリスキー場には、日本でも珍しい雪上車を使用した冬山観光が行われている。

「ワンダーピヤシリ九八六」といい、市民からの公募でこの名称が付けられた。標高九百八十六級のピヤシリ山頂まで冬の日曜、祝日に運行される雪上車は、樹水の合間を縫って静けさの中を悠然と登る。往復三時間の旅は圧巻である。冬山の楽しみは、白い世界で自然がつくり出す芸術を目にすることである。

感動するサンピラー現象

このピヤシリには、わが国でも珍しいサンピラーという自然現象が出現する。太陽柱とも呼ぶが、マイナス二十度以下の名寄のしばれた早朝、キラキラと輝く一本の柱は、太陽と見る人の間にある氷晶が太陽により光り輝き、「サンピラー」となって目の前に突然現れる。

しかし、名寄に長く暮らしている人たちでさえ、なかなか見ることができない現象で、それを目にできた人は感動のひと言であろう。このように積雪寒冷地帯で暮らす名寄の住民は、冬を避けることより、冬を前向きに受け入れようと、名寄らしい冬の生活文化の創造と発見のため、独自の住民活動を続けている。耐える雪から親しむ雪へと…。まちと市民が一体となり、取り組んでいるこれらの活動の成果は、生き生きとした冬の暮らしとなって表れてきている。

日本一を生かしたまちづくり

●日本一の菜の花畑 青森県横浜町

存在感乏しかった町が菜の花で“開花” イベントで観光客増え、商品開発進む



横浜町企画課主事
田浦良次

日本一の作付面積を誇る菜の花畑。それを生かしたイベントの開催される五、六月には十万人を超える観光客が訪れ、町は活況を呈する。

半農半漁の町が幸い

横浜町は、下北半島の首位部、陸奥湾に面した臨海山村で、なだらかな丘陵地帯に沿って土地利用がなされている。冬は北西の風が強く、初夏には低温と濃霧を伴うヤマセ（偏東風）が吹くため、ヤマセが長引く場合は畑作物の生育に悪影響を及ぼすことがある。

基幹産業は農漁業の一次産業で、農業では米、ジャガイモ、長芋、漁業ではホタテ養殖が主体。どこにでもある小さな町、そこにはジャガイモの連作障害を防止するための裏作として、手間のかからない菜の花（ナタネ）が作付けされている。日本の菜種油は、外国産に比べて割高となっており、このため収益性が少ないなどの理由から菜の花畑の面積は年々減少してきた。そうした状況下にあっても、横浜町の菜の花はこの地域独特の半農半漁とい

う就労形態により作付けが維持されている。「畑はあるが、漁業が忙しくて農耕に時間をかけられない」という理由から、栽培に時間をかけずにすむ半農半漁の特徴的な就労形態が生んだ産物ともいえる。

今でこそ、「菜の花作付け日本一」を町民だ



れもが知っているが、日本一をつくるきっかけは「ふるさと創生一億円」だった。その使途検討委員会では、この町にあるもの、ないもの、変えたいもの、変えてはダメなもの、変えたいけど変えられないもの、などを議論している中で、ある女性が「昔は、田植えの時期になると一面の菜の花がきれいだった。今の何倍もあった」とボツリと話した。横浜町に生まれ育った人には、菜の花が咲くのは当たり前のことだったが、よそから嫁いできた人にとっては、一面に咲き誇る菜の花の黄色が、とても印象に焼き付いたようである。

こだわり続けて10年

何もないと、だれもが思っていた町にも、いろんな財産が眠っていることを発見した。その一つが「菜の花」ということだ。しかも作付面積は約二百畝と日本一。住民や産業団体を含めた実行委員会を立ち上げ、「菜の花フェスティバル」が誕生したのが平成三年。マラソン大会やコンサート、モデル撮影会や迷路をメニューに入れ、町としては初めての対

外的な誘客イベントが開催された。それからは富良野市、美瑛町（ともに北海道）などの景観づくりでまちおこしを実施している先進地を調査し、試行錯誤しながらイベントを開催してきた。フェスティバル当日だけでも三万人を超える観光客が訪れるようになった。

県内で存在感の乏しかった町が、菜の花に着目し、そこに新たな価値を見いだし、徹底的にそれにこだわり続け、「菜の花フェスティバル」というイベントを開催して、今年で十年になる。こうした、一つのもののこのこだわりが、町にさまざまな産物を生むことになる。反応が素早かったのは地域の自営業者。イベントの成果に触発され、自ら商品開発や販路開拓を行い、地場産業活性化の機運を高めた。地域住民の意識にも変化が表れた。菜の花で横浜町のイメージアップを図ることにより、「自分の住む町は、菜の花作付け日本一」を認識するようになり、対外的にも自信を持って出身地を名乗り、「菜の花」の話題からさまざまな交流がもたれるようになった。

「菜の花プラザ」もオープン

平成十一年には、道の駅よこはま「菜の花プラザ」がオープンした。これは町、農協、漁協、商工会、森林組合で構成される第三セクターを立ち上げて、設立したもので、菜の花関連商品も八十種類以上となった。「菜の花

プラザ」には商工業者の商品以外に、農水産業従事者も直接出品できるシステムとなった。

とくに農水産物の直売コーナーは、「新鮮、安全、安い」と来客の反響も大きく、農漁家の増収にもつながっている。地域特産品としては、菜の花関連グッズの品揃えをメーンに、菜の花入りのドーナツや地元酪農家の牛乳を使ったソフトクリームなどを販売している。

また、フェアや商品陳列の際には生産者が直接、消費者の声を聞けるため、コミュニケーションを図りながら生産販売が意欲的に行われている。

横浜町は、二十一世紀の田舎町として少子化、高齢化、過疎化など多くの難問を抱えている。しかし、こうした現象は多くの自治体が抱えている共通した課題でもあり、それを打開するうえで重要なことはコミュニティの主体性を発揮することと、すべての人に笑顔で接することではないかと考えている。

個々人が地域の主役に

「菜の花」を起爆剤に、町のイメージアップを図られ、菜の花が咲く時期にはフェスティバルを中心に、各産業団体も海から眺める菜

の花ツアーやパーベキューツアーを企画するなど地域活性化の機運が高まっている。町では交流人口の拡大に伴い、さらに砂浜海岸海水浴場にコテージを建設し、滞在時間延長への取り組みも行われている。

今後はコミュニティの最小単位である個人が主体性を持つこと。そして、自らが地域の



菜の花プラザ店内と菜の花関連商品

主役となれるよう、あらゆるきっかけを人材育成の場にとらえながら、町の自然を最大限に活用したソフト事業と、自然景観に配慮したハード事業とのバランスの取れた事業展開を図り、都市部とは異なる豊かな生活圏としてのまちづくりを図っていきいたいと考えている。

日本一

を生かしたまちづくり

③こいのぼり日本一

埼玉県加須市

こいのぼり製作で芽生えた参加意識 全長百十一メートルの「二世」、まちなかに



加須市企画課係長
斉藤重雄

加須市は都心から約五十キロ、埼玉県の東北

部に位置する人口約七万人の田園都市である。近年、「こいのぼりのまち」「手打ちうどんのまち」として全国的に知られるようになった。

とくに「こいのぼりのまち」に関しては毎年、五月のゴールデンウィークに実施している日本一大きな「ジャンボこいのぼり」の遊泳が、マスコミなどで報道され、ご存じの方

も多いかと思われる。

こいのぼりは武家政治のころ、男児の出世を祈って端午の節句に屋外に家紋を印した旗指し物や幟を立てる風習があったが、武家にしか許されなかったため、江戸中期に町人たちが旗指し物や幟の代わりに、鯉の吹き流しを飾ったのが始まりである。

こいのぼりの由来は、中国の黄河上流にある竜門に、泳ぎ昇ることができた鯉だけが昇天して竜に化するという「登竜門伝説」にあり、

鯉は「鯉の滝のぼり」と言われるように、非常に威勢のよい魚としても知られている。

加須のこいのぼりは、明治初めのころ、傘やちようちんを作っていた人たちが、材料の和紙を利用して作ったこいのぼりを利用し、露天などで売ったのが始まりと言われている。その後、材料が木綿に変わるとともに、職人の技術も向上し、大正のころに

は「手がきこいのぼり」がお目見えし、そのころからこいのぼりの生産地・加須が形づくられた。その後、生産量が年々増え、全国一の生産地として脚光を浴びるようになった。現在、材料や技法は変わってきているが、伝統技法を受け継ぎ、「手がきこいのぼり」の生産を続けている業者もあり、全国シェアは五〇%以上、年間七十万〜八十万本を生産し、量・質ともに、今なお日本一を誇っている。

マラソン大会やグッズも

当市では、この伝統的な特産品である「こいのぼり」をキーワードに、イメージアップや地域振興施策を実施し、個性的なまちづくりを進めようと、昭和六十一年に「こいのぼりネットワークス」と題する環境整備計画を策定した。

以後、この計画に基づき、こいのぼりを形どった噴水や錦鯉の泳ぐ池のある「会（あひ）の川親水公園」や、並木にこいのぼりなどのモチーフをあしらった「やぐるま街道」などの整備を進めてきた。



利根川の河川敷上空を泳ぐジャンボこいのぼり

このほか、駅前広場や市民運動公園、市庁舎内に年間を通じてこいのぼりを泳がせたり、

職員の名刺はもちろんのこと、市の封筒や市政要覧、その他各種刊行物の表紙に、こいのぼりをデザインしたり、その写真を載せたりするなど、矢継ぎ早に手を打ってきた。平成八年からは、市の四大イベントの一つとして「こいのぼりマラソン大会」を開催し、全国から大勢の参加者を集めるなど、これらの取り組みにより、「こいのぼりのまち加須」を全国的に情報発信してきた。

県も、当市の玄関口である加須駅から北に延びる県道をカラーで舗装し、歩道に敷きつめたタイルをこいのぼりの図柄にした。現在、整備を進めている「加須はなさき水上公園」では、こいのぼりを形どった「鯉の森」と称する散策路を整備したり、市の取り組みに歩調を合わせた事業を推進している。

さらに、こいのぼりによるまちおこしの動きは、広く民間にも波及し、「こい」の名のつくオリジナル和菓子やこいのぼりのキーホルダー、ネクタイピンなど、こいのぼりグッズも続々と登場している。

GWに遊泳、大観衆が見学

昭和六十二年十二月、加須青年会議所のメンバーが中心となり、翌年、開催された「さいたま博覧会」に全長百メートルのこいのぼりを出

展し、加須をPRしようとその製作を企画した。

これを受けて、市民延べ約四千人がその製作に参加し、全長百メートル、重さ六百キログラムのジャンボこいのぼりが同六十二年二月に完成した。残念ながら、さいたま博覧会への出展には至らなかったが、市民の健康と平和を祈念して、平成元年四月に開催された「第一回市民平和祭」でその初遊泳が実現し、見事に成功した。それ以降、市民平和祭の目玉として、毎年、ゴールデンウィークにジャンボこいのぼりの遊泳が見られるようになった。

ジャンボこいのぼりが製作されて八年が経過すると、遊泳による損傷も目立ってきたため、今度は全長百一十メートル、重さ七百三十キログラムのジャンボこいのぼり「二世」を、市民延べ約二千人が参加して平成八年二月に製作した。この年の市民平和祭では、その初遊泳の雄姿を見ることができた。

この日本一大きなジャンボこいのぼりを一目見ようと、毎年五月には県内外から約七万人もの観衆が集まり、当市のビッグイベントとなつて定着している。

さらに、「こいのぼりのまち加須」を全世界にPRするため、平成八年と十年には、ハワイで開催された「ホノルルフェスティバル」でジャンボこいのぼりの遊泳を行い、世界中の注目を浴びた。

はぐくまれる郷土意識をまちづくりに

急激な都市化の進展は、地域コミュニティの結束を弱め、市民としての共同意識の低下が見られたが、ジャンボこいのぼりの製作や遊泳時におけるボランティア活動の広がりなどを通じて、

市民の参加意識が芽生えてきたことはまちづくりを進めるうえで、

大いなる前進といえるだろう。近年、実

施した市民意識調査でも、

「こいのぼりのまち」が必ず

ず上位を占め、

こいのぼりを通じた郷土意

識が大いにはぐくまれてきたようだ。

今後は、これまで定着してきたこいのぼりをテーマとした取り組みをさらに充実させ、市の将来都市像である「生き生きとして希望に満ちた住みよいまち」づくりを展開していきたいと考える。



市の各種刊行物や封筒にもこいのぼりの図柄を使用

【日本】

を生かしたまちづくり

●良質マツタケ日本一 長野県豊丘村

農家の副業が“山のダイヤモンド”採り 28年間続く人気の「まつたけ観光」



位置し、総面積は七六・八五平方キロ。東の鬼面山（千八百八十九メートル）を最高峰とする伊那山脈から、西の天竜川まで、西向きに日本一の美しい河岸段丘（かたがき）を形成している。

このような地形から、天竜川沿岸の下段地帯では水田を中心とした農業が発達し、中段地帯はりんごを中心として、ナシ・ぶどう・柿・梅などが栽培され、果樹の生産団地を形成、農業の中核をなしている。

また、人口は七千四百人弱で、飯田市のベッドタウン的役割を果たし、現在は微増傾向にある。

村の総面積のうち、約八〇%の六十一平方キロは山林。その中で赤松林が二十五平方キロを占めていることから、昭和六十年に「赤松」を村の木に制定した。

この豊富な赤松林からは、「香り・味・菌ごたえ」のどれ一つをとっても日本一、と市場から評価される良質のマツタケが生育し、農家の副業として、シーズンともなれば、仕事そっちのけでこの採りに熱く燃える。

豊丘村は長野県の南部、下伊那郡の北部に

赤松を村の木に制定

これは、昨年初めて企画した「豊丘の秋満喫ツアー」で、初めてマツタケを見つけた名古屋市の主婦が発した一こまでである。



片桐明
豊丘村交流センター所長

合わせて年間五斗に及び、金額にすれば、二億円から三億円ともいわれ、まさしく山のダイヤモンドとも言われる。

殺到する電話問い合わせ

毎年秋になると、電話の回線を増やさなければならぬくらい、マツタケに関する問い合わせが殺到する。「マツタケを送ってほしい」「マツタケ狩りをしたいが」「どこかマツタケを食べさせてくれる所はないのか」などである。

しかし、このマツタケを全国的に有名にしたのは、二十八年間続けられている「堀越まつたけ観光」がきっかけとなっている。

この堀越まつたけ観光は、村内七つの区（地域）の中の一つ、堀越区で、昭和四十七年に「何とか村おこし・地域おこしができないか」と区民が結集し、知恵を絞った結果、始まった。毎年九月から十月末までのシーズン中、堀越地区の小学校分校を改装した区民会館で、区民全員が参加し、まつたけ観光の運営に当たっている。シーズン中は区民会館が

観光施設に生まれ変わるのである。

このまつたけ観光の目玉は、マツタケ料理。シーズンは一カ月のみであるが、毎年三千人を超える人出があり、地元区民たちは、大忙ししてお客さんの間を飛び回り、接待に追われている。

料理は、竹コース・松コース・特コースの三つがあり、料金は、四千五百円から一万円まで。特コースの内容を紹介すれば「マツタケのすき焼・どびんむし・焼きマツタケ・マツタケご飯」と、これにお酒が付いて、まさしくマツタケ三昧の内容である。

また、このマツタケ料理のほか、もう一つの楽しみは、地元女性グループによる素朴ながら、優雅な踊りのサービスである。この踊りが始まると、お客さんは一斉にはしを置き、踊りに夢中になる。

この素朴なサービスと、ふんだんに地元産マツタケを使った料理が人気の秘密となつて、一度ここでまつたけ観光を味わうと、翌年にはリピーターが、新しいお客を連れて訪れ、まさにリピーターがリピーターをつくり、二十八年間も続いているのである。

交流センターがオープン

地域で抱える課題を解消する手掛かりにと、平成十二年四月から、都市を含め他の地域住民と積極的に、親密な交流を進めようと交流

センターがオープンした。

この施設では、「りんごの木」のオーナー制度導入、都市の中学生を受け入れての、農業勤労体験学習、都市住民に農業の手助けをしてもらう、援農ボランティア事業、地域の農産物を活用した農産加工体験などのほか、故郷の味を存分に味わっていただきながら、交流人口の増加を目指した「豊丘の秋満喫ツアー」などを企画、実施している。

この、秋満喫ツアーは、当村農業のメーンでもある、りんご狩りと、秋といえば欠かせない栗拾い・きのこ狩りをセットにした観光ツアーである。実は、当村のマツタケは、私



味体験ツアーの昼食の合間に豊丘太鼓のサービス(交流センターだいち)

有林は別として、村有林のきのこ狩りの権利は入札で決めており、その権利取得者以外はすべて止め山(入山禁止)となっている。

しかし、交流センターがオープンし、より積極的な交流を目指す意味でも、この「日本一のマツタケ」を生かさない手はないし、全国各地からも「きのこ狩りをしたい」という多くの要望にこたえるため、議会や地元住民の理解を得て、村有林の一部、八杉を秋満喫ツアーのため、開放することになった。十二年秋から始まったばかりだが大好評である。

マツタケ狩りの新企画

案の定、この企画をホームページに載せたところ、多数の申し込みがあったが、マツタケの発生期間は年間一カ月と短く、マツタケを栽培しているわけでもないため、毎日、観光客を受け入れるのは難しく、人数も限られてしまい、十二年秋の収穫期は多くの人びとにご迷惑をかけてしまった。この教訓を生かし、今年は多くの方にマツタケ狩りを楽しんでもらえるよう、新たな企画を検討したい。

交流センターでは、さまざまな事業を展開しているが、基本的には「地域の農林産物を活用した事業」を実施することで、地域経済の基盤強化を図り、地域の活力が創出されることを期待し、常に前向きの姿勢を崩さず取り組んでいきたいと考えている。

交流センターだいちのホームページ＝<http://www.iidanet.or.jp/~kouryu>

自然環境の良さを文化交流促進に 山村留学とみんなの森大学

過疎からの脱皮目指す

愛知県の最北東部に位置する富山村は、北の背後にそびえる八嶽山の秀峰を境に長野県、東は南アルプスに連なる静岡県の山々、眼下には佐久間ダム湖の神秘的な水面が広がり、天竜奥三河国定公園に囲まれた自然豊かな村である。

しかし、昭和三十年代に入り、佐久間ダム建設に伴い、水没地域の人たちは離村を余儀なくされ、村の人口の三分の一を失った。その後の高度経済成長は、若者の都市への移出を招き、人口減に拍車が掛かった。昭和五十八年には離島を除き遂に人口が日本最少の村となった。村では、この事態から立ち上がるため五十九年、「富山村総合計画」を樹立し、むらづくりの方向を「山村文化交流村」の実現とし、そのための努力を払ってきた。

さらに、平成五年度に策定された「富山村新総合計画」も、山村文化交流の一層の進展に重点がおかれ、山村文化と、人と人との交流を基調にしたむらづくりの方向が示された。

これまでの、富山村の生涯学習の成果を検証しながら、村の現状と優位性を見直し、取り巻く環境の変化に対応したむらおこしを求め、厳しい過疎からの脱皮を目指している。それが「山村留学事業」と「みんなの森大学」の実践である。

その①山村留学事業

都市部の子供を持つ親の多くは、子供たちが育つための環境として、都会では得がたい豊かな自然の中で「じつくり」と、遊びや物作り、川遊びや山登りなどの体験が得られる山村の教育環境に大きな期待を寄せている。

このことは、本村が取り組んでいる「山村文化交流村」の推進事業の狙いと一致するところである。

豊かな自然に抱かれた山村、心温まる人情味のある里、長い年月を経てはぐくまれてきた民俗文化のある山里、この環境を学び舎にして山村の生活を希望する都市部の子供たちを積極的に受け入れ、人材の交流を拡大して村の活性化を図ろうと考え、山村留学事業の企画



富山村教育委員会教育主査
伊藤秀雄

をたて、平成十一年度から着手した。

まず、十二年度の長期留学へつながることを期待して、短期山村留学を十一年八月の夏休みを利用して三泊四日の日程で募集したところ三十四人の応募者があった。そこで先着十人の児童生徒を受け入れ、自然・人・文化をテーマに、キャンプや自然と親しむ体験活動を実施した。

この短期留学の実践結果を踏まえ、十二年度から実施する長期山村留学生受け入れに伴う事業の経営方針および活動内容、指導員の確保、宿泊施設の修理、生活用品などを整備充実した。長期山村留學生の受け入れについては、「温かな心」と「恵まれた自然環境」という富山村のよさを体で実感し、共に生きる心と力をはぐくむことをスローガンに、先着五人の児童生徒を募集した。

その結果、名古屋市をはじめ周辺の町から小学生一人、中学生四人が応募。指導員の募集も同時に行い、八人の応募者の中から男子一人、女子二人の意欲に燃える指導員を確保することができた。

五人の児童生徒と、三人の指導員は四月一日から、「やませみ学園」の生活に入り、この二月で十一カ月目となる。学園は共同生活である。起床から就寝まですべて「自分の力で」をモットーに、助け合いながら「生きる力」をはぐくみ合うことを基本にしている。

とくに生活上生じる諸問題や体験活動計画は、みんなの問題として「どう解決するか」は自分自身の問題としてとらえ、毎日指導員とミーティング時間を設けて問題解決を図る過程を通して、

基本的生活習慣・立心の向上に努めている。

「やませみ学園」の自然体験活動は、四季の移り変わりの中で、自然と人びとの

生活の知恵を学びながら、自然の豊かさと人間との関わりが会得できる活動を展開している。

通学するのは小学生は富山小学校、中学生は富山中学校。学校生活においては、「一人学級」が解消され、互いに鍛練する学習活動が学習効果を高め、学校の活性化を図っている。

その② みんなの森大学

山村文化交流村を目指す本村は、平成元年

八月、お互いが、お互いを、認め合う努力をしようとすれば、国籍・年齢・学歴・男女の差を問わない「みんなの森大学」をつくった。富山村の豊かな自然をキャンパスに、「好きなことを好きなところで、好きなように、好きなだけ学んでみませんか」を提唱して村外者にも参加を呼び掛けた。村民との交流の場となる、この特色ある「みんなの森大学」がこうして始まって、十二年間も継続している。



山村留学(上から、自習、炭焼き、寮のひさし作り、柿とり)

一セミナーは、一泊二日の講座で実施するため、宿泊施設のあるバンガロー村をメイン会場にして開講しているが、収容人員に限りがあるので、一セミナー三十人を限度にしている。

本年度実施している「みんなの森大学セミナー」は、富山の自然・文化を生かした内容で、十セミナーを計画し、既に延べ百六十七人の受講生が富山の地で、村民と触れ合いな

がら学習を終えている。多くの受講生は「自然がとても素晴らしく、空気がおいしくて水がうまい。村の人は心が温かく、親切だ」と口々に感想を述べている。この言葉にスタッフも励まされ、山村文化交流村の活性化は着実に前進している。

三月に交流センター完成へ

富山村新総合計画の精神を受け継ぎ、二十

一世紀も「むらづくり」のため山村留学事業とみんなの森大学セミナーを積極的に進めていく方針である。

現在、建設中の「山村教育交流センター」も三月半ばには完成の予定である。十三年度は山村文化交流の発信拠点として、山村留学生十一人の受け入れがすでに決まっており、セミナーの企画などセンターの活用場づくりが、これからの課題である。

日本

を生かしたまちづくり

⑥ 梅の生産日本一 和歌山県南部川村 みなべ町

梅と健康を抱き、合わせた村づくり 将来見据え、梅研究施設も充実



春夏秋冬たゆみなく

日々のつとめにいそしめる

日本一の梅の村

日本一の炭の村

うるわしわが村南部川村

これは昭和三十年に南部川村が誕生したときに制定された村歌の一節である。

薮梅の奨励が起源

南部川村は、緑豊かな自然のもと梅の香りのする「活力に満ちた村」として、すべての村民が生きていくとして生産に励んでいる。

紀州梅の生産量は年間約二万ト、売上高約九十億円は日本一。村の人口の八〇%が梅生産にかかわる梅の里である。

村づくりのスローガンは「梅と健康の村づくり」である。梅を中心にして農業、工業、商業の一貫した地場産業を形成し、その振興を図って村民経済の充実を期している。一方、健康面では、心身共に健全な人づくりを目指している。

梅の花は百花の魁さきがけといわれ、寒風冷氣の中、力強くつぼみを膨らませてくる精力は、実に神秘的な生命力を持っている。私どもはこの花の精神を見習い、これまで先人たちがたゆまざる努力によってつくり上げてくれた良き伝統と基盤を受け継ぎ、夢とロマンに満ちた二十一世紀社会を築き上げるため、日夜懸命の努力を続けているのである。

江戸時代、紀州田辺藩は、篠竹しのたけの生えているようなやせ薮は五穀耕作不能地として免租にした。たまたま、その薮の中に自生の梅が生えていて（これを「薮梅」といった）領民はこの薮梅の実を食用にしていたが、薮梅の生えているような土地は免租にされているところから、重税にあえぐ農民は少しでも節税になるように、他の土地にも梅を植えて免租地を広げていったということである。これが当地方の梅の起源といわれる。

このことは裏を返せば、賢い殿様が産業振興を図るため、土地にかける固定資産税を減免して、領民の生活を守り、活力を与え、ひいては自藩の繁栄を目指したものだと思われる。



南部川村長
山田五良

今の時代でも、この基本精神は大いに見習わなければならないと思う。

村の顔は「うめ課」

梅は、明治以来たびたびの戦時下で、軍需食品として、また悪疫予防食品として、需要が伸びてきた。昔の武士は「梅を望みて、渴きを止める」を戦場の心得としていたそうで、飲み水がなく、口が渴き体力の消耗の激しいとき梅干を思い出せば、口中のだ液が充滿し、一時的にも渴きをしのぐことができるということである。

梅干は、だ液の分泌を促し、消化機能を活化させると共に、殺菌力も働き、体内ではアルカリ性化するなど薬理効果を持った価値の高い保健食品といえる。

「とにかく梅にたつき（生計）をかけし里」とは、隣の南部町の俳人中川化生さんがわが南部川村を詠んでくれた句である。

南部川村は、とにかく梅にかけた村づくりを進めているから、村の行政も必然的に梅シフトを敷いている。まず、役場に「うめ課」

というセクションを設置している。これは昭和四十八年に新設したもので、梅産業振興全般を担当している。今では、村にはなくてはならない名実共に南部川村の顔である。

梅の栽培加工は、長年の経験と勘に頼る面が多く、科学的試験研究は他の作物に比べ遅れていた。そこで産地自ら試験研究に取り組むため、ふるさと創生一億円交付金を原資として、村立の梅研究施設をつくった。梅の栽培から加工まで、一貫した研究施設として、二十一世紀の梅づくり村づくりの拠点施設となつて活動を続けている。

特産の備長炭も振興

南部川村の梅には、どんな歴史と人びとの努力があつたのかを解明し、自然と人びとはぐくんだ技と知恵を学び、村の梅の未来を展望し、梅にかかわる情報を広く発信する目的で平成九年七月、うめ振興館を設置した。

この振興館は、梅資料館、歴史民俗資料館、物産販売所、屋上展望所から成り立っている。また、館全体をまちむら交流の場としており、「道の駅」にも指定されている。さらに村の子供たちの、ふるさと学習の場としても幅広く活用されている。

村のもう一つの特産物に紀州備長炭がある。紀州備長炭は、原木ウバメガシを焼き上げた硬質白炭であり、最優良品とされている。



全国から十二市町村が集まつて「うめサミット」(南部川村で)

さらに、水質浄化、脱臭、防湿、防虫など生活環境面に大いに役立っている。

村では昭和五十七年から、足元にある収入源の活用」を提唱して、備長炭振興を図り、伝統の火を消すことなく、今日のように脚光を浴びるに至っている。

紀州備長炭振興館は、炭の資料展示、炭焼き体験など村のシンボル施設であり、情報発信源ともなっている。

村づくりで総理大臣賞

二つの特産物の産地として、全国木炭サミットを平成五年二月に本村で、また全国梅産地首長会議(うめサミット)を平成十二年二月に開催、いずれも大成功を取めた。

健康の村づくりは、健康食である梅を生産

木炭はもともと燃料であるが、近年は化石燃料に変わり、薪炭を使う家庭がほとんどなくなっている。しかし、業務用特需としてかば焼き、焼き肉、茶道の湯わかしなど独特の風味を引き出すため根強い需要がある。

する村民が不健康ではお話にならないところから保健衛生、生涯学習に力を入れている。ちなみに国民健康保険の一人当たり年間医療費は二十万円前後で、和歌山県下では最下位が長く続いている。生活保護受給率は、人口千人当たり一・四人と、これも県下最下位にある。

平成十二年度の「ふるさとづくり大賞」(財あしたの日本を創る協会主催)では、わが村が内閣総理大臣賞に輝いたが、これは村民が日ごろの村づくりに精励していることが認められたもので誇りに思う。

梅と健康の村づくりは、一応、軌道に乗ってきたと思うが、梅はこれから外国産との厳しい競争という試練に立ち向かわなければならぬ。

日本の農業は、ほとんどが外国産食料輸入のため、窮地に立たされている。食糧の自給率は、国力のバロメーターであるから、日本の農業をつぶしたら国自体が減びることを、国も国民も自覚しなければならない。



日本

を生かしたまちづくり

●日本一の愛の鐘 岡山県東栗倉村

「愛の鐘」鳴らし、カップル620組が誕生 凱旋門風、荘厳な音色で門出祝す



東栗倉村企画室主幹
小守克則

四季折々の美しい景観

東栗倉村は、岡山県の最東北端に位置する人口千五百人の小さな村である。岡山県下の最高峰、後山に連なる山々は、氷ノ山後山那岐山国定公園に指定されており、春は山桜やこぶし、初夏は新緑、秋は紅葉、冬は雪景色と四季折々の美しい景観を見ることができ

る。後山は、「霊山後山」「行者山」とも呼ばれ、古くから信仰の山としてあがめられ、今なお女人禁制を守り続けている。東栗倉村へは、公共交通機関利用の場合は智頭急行大原駅から、自家用車の場合は中国自動車道佐用IC下車、国道373号で大原町を経由して国道429号で東栗倉村へ入る。



愛の鐘のマーク

農山村にありがちな「暗い、閉鎖的」なイメージを払しょくするために、村ではいろいろな知恵を絞って、そして始めたのが日本一の愛の鐘「リュバン・ペール」(フランス語で、緑のリボン)を

村のシンボルとした新たな村づくりである。

人気絶頂、増える挙式

「人を愛し、自然を愛し、ふるさとを愛する」。そうした村民の心をはぐくむことを基本に「愛の村構想」が出来上がった。ソフト面においては、「愛の村創生」を推進し、花いっぱい運動を通じた良好な住環境の整備、河川の美化、農地や山林が息づく全村公園化、海外研修などによる人材育成に取り組んできた。ハード面においては、「音色」「創造」「自然」をテーマとした「愛の村リゾート基本構想」による、滞在型の静かな保養地づくりである。

この構想に基づき、「音色ゾーン」にあたる日名倉山(一〇四七・四畧)の中腹にベルピール自然公園を建設した。山岳信仰の後山を男山と呼ぶのに対して、この日名倉山はなだらかな稜線を描くことから女山、別名美作富士とも呼ばれる。

高さ七百五十〜八百畧に位置するこの公園には、リュバン・ペールを収容した凱旋門風の巨大な鐘楼(横幅二十畧、高さ一八・二畧)

があり、二人だけの結婚式が挙げられるベルピールホールがある。ここから眺める雄大な景色を背景とした「二人だけの結婚式」は、若いカップルに人気があり、遠くは東京、埼玉、横浜、山口、四国、九州方面からの挙式者も多く、これまでに六百二十組のカップルがここで式を挙げている。

オープン当初は、PR不足もあり、初年度の平成四年には七組の挙式しかなかったが、翌年以降は四十七組、七十六組、百三十九組と着実に増え続けている。

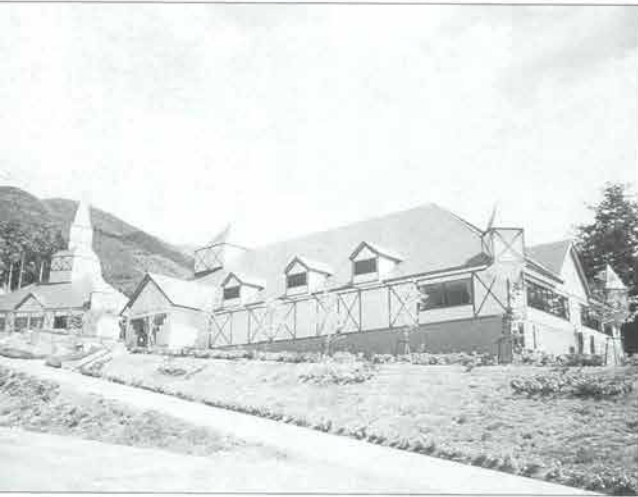
挙式は、ベルピール自然公園関係者の立ち会いの下で、ベルピールホールでの結婚セレモニー、そして二人は鐘楼まで階段を上って大小二個ある「愛の鐘」を鳴らす。フランス製の大きい鐘は重さ六ト、直径二畧、小さい鐘は重さ三ト、直径一・五畧。シルバークラ―で、荘厳な音色が二人の門出を祝ってくれる。また、二人の誓いの言葉と、思い出の品物を入れたタイムカプセル「愛の箱」は、五十年間愛の鐘の下で保管され、五十年後に二人でここを訪れば、愛の箱から昔日の思い

出が飛び出してくる仕組みになっている。

個性的な観光ゾーン

結婚式の増加とともに来園者も増え続け、毎年五、六万人がここを訪れる。四季折々の変化や雲海など自然が醸し出す景色を楽しむに訪れるリピーターも増え、写真愛好家も多い。鐘楼の横には「ロンポアンタムール」と名付けられた「愛の広場」があり、人と人との調和を表す母子像、老人像、少女像のミニユメントを配置している。

「創造のゾーン」には、平成二年完成のカラクリおもちゃ作家や家具作家など、木の持つ温かさを題材とする、クラフトマンの活動拠点施設「クラフトハウス」、同七年にオープン



現代玩具博物館

した「現代玩具博物館・オルゴール夢館」がある。この博物館には、産業社会が急速に発展した一九五〇年代後半以降に登場した、ヨーロッパを中心とした木のおもちゃ約四千点を収集・展示している。一八九〇年代からのアンティークオルゴールや、オートマタオルゴール（カラクリ自動人形）の展示施設もあり、毎日定時におもちゃツアーやオルゴールコンサートを行っているほか、季節ごとに特別企画展やおもちゃ教室を開催している。

現代玩具博物館の西側には、東栗倉・愛の村パークがあり、食と健康のテーマ館として、都市との交流、村の観光拠点施設としての役割を担っている。農園で採れる季節の野菜を使った田舎料理の提供、リラクゼーション



愛の村パーク

ンルームでは女性の美肌効果・保温効果にすぐれた光明石温泉（人工温泉）や季節ごとに変わる薬湯風呂で心身のリフレッシュ、手づくりのパンやハーブ石鹸づくり、ドライフラワーのアレンジメントなどが体験できるほか、農園での野菜収穫体験、コテージでのアウトドア体験も人気の的である。

資源掘り起こしと活用

地元産のヒメノモチや農産物を使った特産品である餅類の製造販売を行っている「東栗倉工房」、県南・京阪神の人びとに人気がある後山の自然の湧き水「愛の水」、村営宿泊施設「こぶしの里後山」がある。

日本一のベルの導入により、村のイメージは確実にアップし、クラフトマンの村への移住、U・Iターン者の増加、観光施設や上下水道の整備、花いっぱい運動を通じた住環境の創出など、さまざまな波及効果を生んできた。

今後は、豊かな緑に育まれた自然、産業、伝統、文化など地域に埋もれている資源の掘り起こしや活用を積極的に図り、これらを活用したグループ育成も同時に行い、それぞれの活動を通して交流の輪を広げ、「人、モノ、情報」が行き交うネットワークづくりの推進、インターネットを活用した情報の発信を積極的に行う。

雲

仙・普賢岳が百九十八年ぶりに噴火したのは平成二年十一月十七日。噴火活動は七年五月まで継続し、この間、島原市と深江町は度重なる土石流・火砕流災害に襲われました。中でも三年六月三日に発生した大火砕流は、避難勧告地域の中ではありますが、消防団、警察、マスコミ関係者ら四十三人が犠牲となる大惨事となりました。

普賢岳の谷筋から流れ出る水無川、中尾川両流域では、土石流、火砕流で、住宅など計千三百八十八棟が全半壊（焼）し、被害総額は直接被害が七百四十八億円、間接被害が千五百五十二億円の計二千三百億円に上りました。

噴火災害は、風水害のような一過性の災害ではなく、長期化する可能性が高い災害であり、これは現在も全住民が島外避難中の三宅島噴火災害、北海道の有珠山噴火災害などでも同様です。噴石、隆灰、火山性地震といった噴火活動そのものによる災害だけでなく、山腹にたい積した火山灰、溶岩流が火山灰泥流、土石流、火砕流などを引き起こします。しかも、火山活動の予測は専門機関でも難しく、火砕流が断続して発生している間は、危険地域から住民を長期間、避難させる以外、手の打ちようがありませんでした。

市長として、三年六月三日の大火砕流の直後に、全国で初めて住宅密集地に警戒区域の設定をするという苦渋の決断を行いました。以後の火砕流、土石流で、新たな人的被害を出さずにすんだのは幸いでした。

住

住宅密集地への警戒区域の設定という異常事態に、国、県も多大の配慮をしてくださり、普賢岳災害では、「災害対策基金」が設立され、被災世帯への生活補助、生活再建のための資金補助といった経済的な支援が初めて可能になりました。

また、被害地域では、国の直轄事業として百数十基からなる砂防ダム群や土石流を排出させる導流堤の建設、川幅の拡幅、被災地の地盤かさ上げといった防災復興事業が行われてきました。

これらの事業は、単に災害復旧にとどまるのではなく、普賢岳という「活きている火山」と共生していくために必要な近代的な防災対策を施し、同時に、普賢岳災害という火山国日本特有の災害を全国の方々に知っていただくために、島原地域一帯を防災自然公園都市として再生しようとするものです。

あの災害時には、全国のみなさまから長期にわたってご支援、激励をいただきました。お陰をもちまして、被災地域の復興もほぼ軌

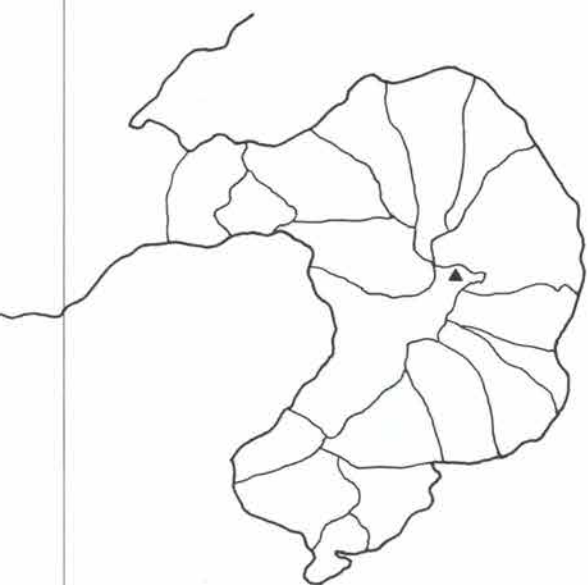
道に乗せることができました。誌面の最後をお借りして御礼申し上げます。復興成った島原へ、ぜひ一度お越しください。

雲仙・普賢岳 噴火災害から



10年

鐘ヶ江 管一 前島原市長



●日本一を生かした
まちづくり

日本一には、個性と魅力がある

無限に近いほど「日本一」はあるが、
まちづくり絡みに絞ってみても
あまりに多くてこの欄で紹介するのに困った。
取り上げた「七カ所の日本一」は、
編集者の独断に基づくものであることを
あらかじめお断りしておきたい。

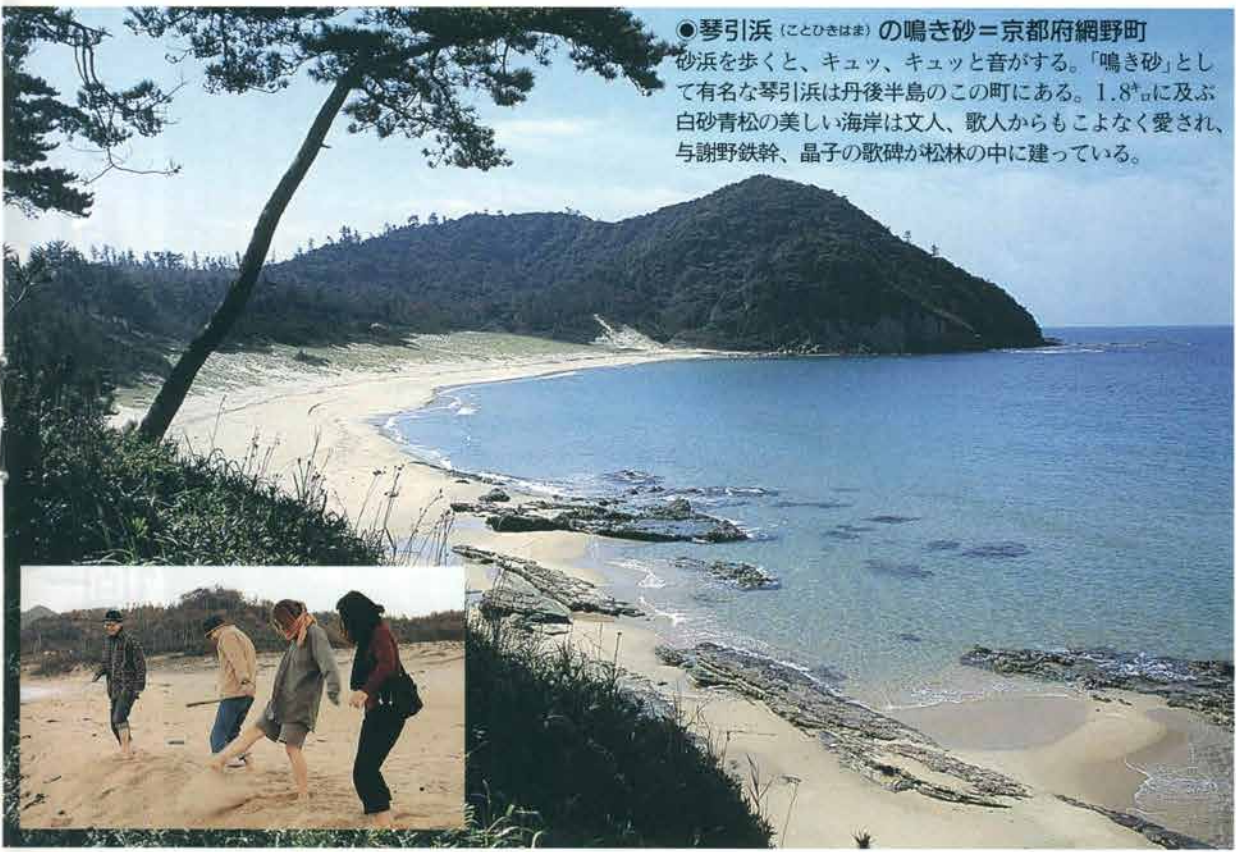


「日本一」の世界を幻想させる
日本一「大きなふき」ラワンフキ



●広い、足型、ふきⅡ
北海道足寄 あしまる町
市町村の中で面積日本一がこの町。
町の端から端まで車で走って一時
間以上かかる。ハリウッドの有名
人字型に似た「足型歩道」は町の
風物詩。ふきの大きさも日本一。
草丈二、三メートル、直径十センチもある。
向東京ドームの九百八十倍の広さをもつ
大規模草地育成牧場
左足型歩道

●琴引浜（ことひきはま）の鳴き砂＝京都府網野町
砂浜を歩くと、キュッ、キュッと音がする。「鳴き砂」として有名な琴引浜は丹後半島のこの町にある。1.8kmに及ぶ白砂青松の美しい海岸は文人、歌人からもこよなく愛され、与謝野鉄幹、晶子の歌碑が松林の中に建っている。



●埋蔵量日本一菱刈金山＝鹿児島県菱刈町
金の埋蔵量約250tで日本一。国内産出量の9割を菱刈金山から産出する。鉱石1t中の金量60gは世界一の金品位を誇る。カッパ伝説の町でも有名。湯之尾滝公園には多くのカッパ像が建てられている。



●日本一細長い半島＝愛媛県三崎町

佐田岬の先に三崎町があり、一部は瀬戸内海国立公園。半島最先端の岸壁にそびえる白亜の灯台が佐田岬灯台である。ドライブして行き着くところが「三崎漁師物語り」で、アワビ、サザエなどあらゆる海鮮料理が食べられる。



●日本一の藤の里＝静岡県藤枝市

高貴な気品と優しさが市の花「藤」のイメージである。10年前から藤の里づくりにこだわり、シンボルマークの作成、藤をモチーフにした美しい景観づくり、お菓子などの特産品開発に心掛けてきた。4、5月ごろ、藤の花が咲き誇る。





●本マグロ水揚げ日本一＝宮城県塩釜市
仙台市から電車で15分。日本三景松島遊覧の玄関口でもある。本マグロの水揚げ量は年間1200トン。かまぼこなど水産練り製品。「1平方メートル当たり」の店数は共に日本一。「奥の細道」の松尾芭蕉が塩釜から松島へ舟で渡ったと綴られている。



●日本一の酒米「山田錦」＝兵庫県三木市
山田錦は大粒で張りがあり、心白が鮮明で低たんぱく質。しかも精白にして歩留まりが良く、最高級の酒米といわれる。生産量も三千トンを超え、全国一の山田錦の産地となった。山田錦を100%使った心白酒「酒壺」は三木市の特産品。

アメリカに リサイクル 学

松田美夜子

生活環境評論家

二十一世紀を迎えて、日本にはごみとリサイクルの新しい法律が産業分野ごとに次々に誕生している。中でも建設分野に制定された

品の利用促進を義務付けたもので、どちらの法律も二十一世紀の幕開けにふさわしい明るい展望を私たちに抱かせてくれる政策の展開

「建設資材リサイクル法」は、解体される建物の分別、リサイクルを発注者に義務付けたもので、この法律による効果は、埋め立て地の延命や資源の有効利用などにおいて、極めて大きいことが期待されている。

併せて、同時に「グリーン購入法」が制定されたが、これは、国の公共事業における再生

である。

建設資材リサイクル法が今後、実際に活用されていくとき、先進事例としてお手本になるのが、アメリカの取り組みである。一九九八年に二十日間、アメリカのリサイクル事業をアメリカ連邦環境省（EPA）のアレンジで学ぶ機会があった。その折、アメリカで再生品利用拡大で、最も活発な活動をしているのが建設業界であった。

アメリカでは、大統領の直轄として環境諮問委員会が一九九三年に組織され、その傘下にリサイクル品の購入促進を行うため「リサイクル商品購入ビジネス同盟（BRBA）」を設立。一九九七年には「ビルおよびオフィス改修プロジェクト」を組み、その事例を報告書にまとめている。

たとえば、世界の三十二カ国で廃棄物の管理と、リサイクルを行っている国際的な企業ウエストマネジメント社は、ワシントンDCの本社オフィスの新築に当たり、その建設資材を再生品と中古品を使うことを建設会社に指示。発注主のウエストマネジメント社の希望は、再生品を使うが仕上がりの美しさの点でも優れていること、という条件であった。結果として、この本社オフィスは、その資材の八五%をリサイクル製品で調達した。そ

の事例が美しい写真とともに紹介されている。

そのほかに、この報告書には、マクドナルド社、エリクソン社、ベン・アンドジェリー社（人気のあるアイスクリーム屋さんのチェーン店）、公官庁舎、地下鉄、大手スーパーマーケット、自然保護団体のオフィスやビルの改修プロジェクトで、どのような取り組みが行われたかを仕様書とともに紹介している。

その仕様書には、工事面積、建設会社、施工会社、設計者、資材の購入先、施工費用も記載され、それぞれの事例が工事で使われた資材の約八五%をリサイクル製品を使って完成しているのである。

最もよく使われている部分は、天井シーリング、フロアの床、フローリング、壁材、窓枠、窓ガラス、備品の机と椅子、受け付けのカウンター材など。接着材、密封材、ペイントは、すべて低揮発性有機溶剤、または非石油溶剤を使用している。

国土交通省の推進している「道の駅」や「川の駅」に、このアイデアが取り入れられたら、まちづくりの面でも社会への貢献はものすごく大きい。国土交通省と市町村とのパートナーシップで実現するといいなあ。



column

日本

を生かしたまちづくり

⑧ 滝の数日本一

徳島県木沢村

村おこしに滝写真集、全国から反響 地元民が撮影に協力、近く第2集



木沢村産業企画課主事
増井英子



写真集第一集

山村に100以上の大小の滝

人口約千人。徳島県南西部の剣山山麓に位置し、総面積一五四・九七^キのうち、山林面積が九七%を占める平地の少ない山村が、「滝王国」と呼ばれる木沢村。滝の数は、ざっと大小百以上はあるだろうといわれている。

「日本の滝百選」にも選ばれている「大釜の滝」をはじめ、形式も規模もさまざまな滝が散在し、数年前からは、グリーンツーリズム推進に力を入れている。一人でも数多く村に足を運んでもらおうと、最近、一冊の滝写真集も出版された。

昭和六十一年、村おこしのため地元村民で結成された「村おこし三十人衆」の提案がそのきっかけとなった。写真集づくりはまず、滝の実態調査から始まった。村内をくまなく歩き、調査すること約一年。地元の人びと、村職員が一丸となり、行ったこともない山々へ足を運び、やつとの思いで撮影にまでこぎつけた。国道沿いのなだらかな地域から、危険極まりない幽谷まで、写真集のサブタイトルどおり、まさに「神秘とロマンを求めて」の状態だった。氣息奄々^{えんえん}に登る山道。行き着いた滝の雄姿に、しばしぼうぜんとたたずむ。今回の撮影は、三十二滝を収録し、『滝王国inきさわ』と題して第一集が発刊された。

発刊にあたり、関係者には、言葉ではいい尽くせないくらい感謝の気持ちでいっぱいである。だが、もうすでに、第二集発刊の作業を始めており、関係者の方々には、ご迷惑をお掛けしながら協力を仰いでいるところである。

第一集の発刊が、マスコミで報道されたこともあり、全国各地から滝写真集の購入、問い合わせが殺到、その対応に大忙しだった。

滝写真集に魅せられ、実物の見学に木沢村まで足を運んでくださる方もいた。

滝にまつわる2つの秘話

滝は昔、行者が修行のために訪れ、心身を清めていたという神聖な場所。木沢村にも、神にまつわる滝の話がいくつかある。その中から一、二紹介してみたい。

まず、『滝王国inきさわ』第一集に掲載されている「千本滝」の話。

大美女谷から約三百^ミ下流にある千本滝は、落差約四十^ミの壮麗な滝である。名称の由来は昔、千本の木材を滝壺の淵に落とし込んだが、全部沈んで浮かび上がらなかったという説と、滝壺へ落とし込んだ千本の木材が、翌朝にはすべて滝の上に浮いて、返ってきたので「千本返し」の滝と呼ぶようになったという説とがある。いずれも滝壺にすむ竜神の怒りの仕業といわれてきた。木沢村は、かつて林業が盛んであった。道路も悪く、自動車すらなかった時代、材木を川などに流し、川下へ運んでいた。以来、この千本滝を流材す

るときは、事前にお神酒などをあげて、竜神に祈願したという。

第二集に掲載予定の、「ほら貝の滝」というのがある。標高千九百五十五^{メートル}、西日本第二の高峰剣山の山中にある。落差は約二十^{メートル}。この名称も、滝がほら貝のように見えるからという説と、剣山の修験者が修行のために、滝の周りでほら貝を吹いていたからという説がある。いずれにせよ、滝が神聖な場所とみられてきたことには変わりない。

木沢村には、透き通って美しい、サファイヤブルーやエメラルドグリーンの色をした滝壺が数多くある。それぞれに形が違い、雰囲気も違う。人間の顔が一人ひとり違うように、滝も一つひとつが違う。雄滝と言われる滝もあり、雌滝と言われる滝もある。こんなにたくさん滝があるのに、同じ滝は一つもない。険しく見える日も、優しく見える日もある。滝は静かに強く生きているようだ。

私のもとに、老夫婦の方が写真集第一集を買い求めにみえた。この方たちも滝に魅せら

れ、足を運んでくださったのだろう。

温泉と滝を抱き合わせ

滝写真集のおかげで、滝を見に来る人が増え、滝は大事な観光スポットとなった。滝めぐりの拠点として観光施設「四季美谷温泉」を利用している方も多く、観光上のセットになっている。大釜の滝、大轟の滝、新居田の滝を主要コースに、滝めぐりのあと、温泉につかる。こんな、観光客が増えており、今後は、滝の看板、コース設定、滝までの道路整備を検討中である。

また、三県八町村持ち回りで開いている「四国名瀑サミット」がある。滝をテーマにしたフォーラムで、平成十三年度には、木沢村で開催予定である。日本の滝百選に選ばれて有名なものが、「大釜の滝」である。国道193号線沿いにあり、落差は約二十^{メートル}で滝壺も大きく、滝壺までおりていけるので、観光客が多い。秋には燃えるような紅葉が滝の周りを彩る。美しい滝と紅葉が、お互いを引き立たせ、

その絶妙のバランスは見る者のひとみをくぎ付けにする。春夏秋冬と季節は巡り、歳月を重ねても、滝の美しさは不動のものだ。

滝王国の発刊後、購入した方々から、いろんなご意見をいただいている。第二集ではそれらを生かせるようにしたい。

実物の滝見学にぜひ！

これから、残りの滝の撮影が待っているが、全国の滝ファンのために、木沢村のために、いや木沢村の美しい滝々のために、がんばることにしよう。『地域づくり』をお読みになされた皆さんも、機会があれば、『滝王国inきさわ』をぜひご覧になってくださればと思う。『♪君と逢瀬は しぶきに濡れて涼し大釜大轟 香るささゆり ああ黒髪にさしてやりたい 滝めぐり』と木沢音頭にも歌われるように、滝は、訪れる人びとをセンチメンタルにさせるようだ。ぜひ、実物の滝見学に木沢村へ足を運んでください。滝あり、緑あふれる、美人の多い？ 木沢村へ。



落差40mの千本滝

日本一を生かしたまちづくり

⑨ 日本一のマラソン練習コース 大分県久住町

高地に一周3キロの天然芝コース 全国から多数の選手・観光客で賑わう



久住町社会教育課主事
森 淳史

村おこしグループがつくる

色彩豊かな自然と共生するまち、久住は大分県の西南部、熊本県との県境に位置する。九州本土の最高峰中岳（千七百九十一メートル）をはじめ、久住山・大船山などの美しい連峰を北に擁し、その南麓の標高六百メートルから千五百メートルに広がる久住高原は、三千八百センチもの広大な面積を有している。

久住山系を

源に十四本の河川が大野川、大分川へ注ぐ。地熱や温泉などの自然エネルギー資源も豊富で、現在、十三カ所に温泉が点在している。北部山岳・高原地帯を中心に、阿

コースには幅五メートルにわたって天然芝が張られている



蘇くじゅう国立公園の指定を受けており、これら貴重な自然資源を有効活用したまちづくりを進めている。

そういつたまちづくりの流れの中で、昭和六十年、当町の村おこしグループ「星草」の会員が中心となり、クロスカン トリー専用コースがつくり上げられた。「日本一のマラソン練習コース」と呼ばれるこのコースは、広島日出国氏（現沖電気宮崎陸上部監督）にコース設計のアドバイスを仰いでつくられたもので、一周三千メートルのコースに、約五メートル幅の天然芝が張られている。芝は足にやさしく、けがを防止できること、さらに冷涼な気候、高低差七十三メートルのコース設計、標高九百メートルの高地にあること、がこのコースの特徴であり、「日本一」といわれるゆえんである。

また、クロスカン トリーには、①自然の中を走ること気分がリラックスできる②起伏地を走ること心肺機能と筋力が強化できる③不整地を走ること、バランスのとれた走りが身につく、などの効果のあることが専門誌などでは言われている。

予約で満杯の宿泊施設

夏のシーズンには数多くの実業団・大学・高校・中学の陸上部が合宿に訪れ、町内に十九ある宿泊施設は予約でほとんどいっぱいになる。温泉が町内の至る所にあり、練習の疲れを取ることができることも人気の一要因として挙げられる。

この「日本一のマラソン練習コース」で年二回、手づくりのクロスカン トリー大会が開かれている。七月下旬に中学・高校・一般の選手を対象に開催される全国的な大会と、十月中旬に直入郡内外の小・中学生を対象として開かれる大会である。

昭和六十三年に始まった前者の大会は、当初、参加選手数が五十四人だった。その後、夏季合宿でコースを利用する学校・実業団が増えたこともあって、参加選手数が大幅に増加。第八回大会には、大会最高の千二百四十七人の選手がコースを走っている。パルセロナ五輪銀メダリストの有森裕子選手や旭化成の選手たち、シドニー五輪で金メダルを取っ

た高橋尚子選手の監督、小出義雄氏もかつて当町を訪れている。

第十四回を迎えた昨年は、九州はもとより遠くは埼玉県からも参加していただいた。七月二十三日の大会当日には中学生二百六十二人、高校生百七人、一般二百四十八人の選手が健脚を競った。

ほぼ同じく、昭和六十二年に始まった後者の大会であるが、この大会は「広島杯駅伝・ジュニアクロスカンントリー大会」と言われ、コース設計に携わった広島日出国監督の名前をいただき開催されている。昨年は十月二十一日に行われ、町内はもとより郡内外の小学生百六十一人、中学生百十四人の選手が参加した。

「町のスポーツ」に陸上長距離

「地域の特性や実態を生かした特色あるスポーツ活動を実践することにより、代表的スポーツを育成して、潤いと活力に満ちた魅力ある地域づくりを進める」とを趣旨とした「一村一スポーツ」推進事業を、大分県が平成五年度から実施している。当町は、「一村一スポーツ」に陸上競技、中でも町民の関心の高い長距離を選定し、クロスカンントリーコースを有効に生かしたスポーツのまちづくりを推進している。

前述の二つの大会は、当町から世界へ羽ば

久住高原クロスカンントリー大会



たいていくランナーが一人でも生まれることを願って開催している。実際のところ、郡内の中学校からは県大会を制し、九州・全国大会に出場するほどの実力を持った選手が数多く育っている。

平成五年三月に策定された久住町新総合振興計画では、「やさしい町・たくましい町・美しい町の創造」を基本理念に、新しいまちづ

くりにまい進している。同じく五年度から、自然と共生する活力あるまちづくりを目指し、県の協力を得ながら「地球にやさしいむらづくり」事業に取り組んでいる。クロスカンントリーコースやグライダー滑空場などの野外スポーツ施設の改修、展望所・遊歩道などの観光施設の整備もその一端である。

観光客二倍に増える

そうした事業に加えて五年以降、民間による観光リゾート施設の相次ぐオープン、アウトドア志向の高まりの結果、観光客は五年度が百十万八千人であったのに対し、十年度には約二倍の二百十四万人まで増加している。

古くより、交通の要衝であった国道442号線沿い、約四キロにわたる松並木と並行してつくられたクロスカンントリーコースは、年中無料で開放されている。久住山・阿蘇山など三百六十度見渡せる雄大な景観は、ランナーのみならず、観光に訪れた人びとも立ち寄り、弁当を広げたり、スポーツを楽しんだりしている。

今あるクロスカンントリーコースを、大切に維持管理しながら、久住高原にやってくる観光客やランナーにとって快適な環境を提供できればと考えている。また、コースで開催される大会についても町民の熱い期待にこたえながら継続していきたい。

わがまちづくり支援事業 の創設について

(下)

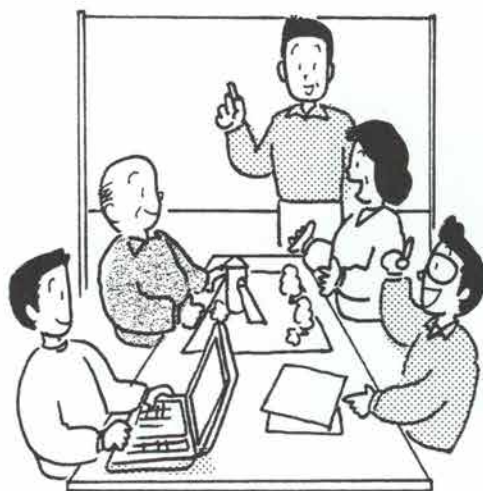
1 はじめに

昨年末に平成十三年度の地方財政対策が決定され、「わがまちづくり支援事業」が創設されることとなりました。今後、地方財政計画の決定や地方交付税法の改正法案として国会での審議を経て、具体的な財政措置が固まっていくなりますが、前号に引き続き、「わがまちづくり支援事業」の現時点における案をご紹介します。

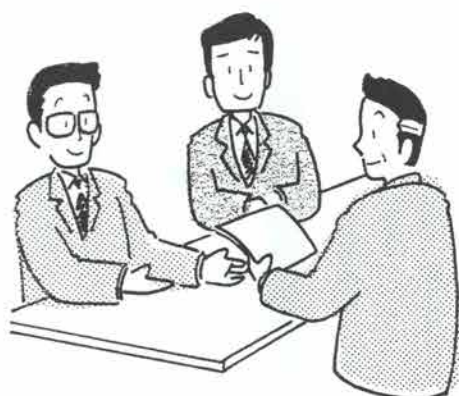
2 わがまちづくり支援事業の財政措置について

分権型社会における地域づくりには、これまで以上に住民が主体的に参加し、積極的役割を担うことが求められており、このため、住民が中心となって考え、住民が主体となっていく地域づくりを推進することとし、住民による話し合いの場づくりやその結果を受けた取り組みに対して、地方財政措置を講じることとしています。

平成十三年度事業費は、七百五十億円程度



話し合いの場づくり



わがまちづくりの提案

であり、次のような市町村の取り組みに要する経費について、普通交付税措置を講じます。

(1) 話し合いの場づくりに要する経費

① 住民は、たとえば小学校区単位程度の広がりにおいて、話し合いを実施する。

なお、話し合いの実施に当たっては、インターネットなどを活用し、情報提供や他の地

域との情報交換などを行う。

② 話し合いの結果を、住民が「わがまちづくりの提案」としてとりまとめる。住民は、地域福祉、子育て支援、商店街活性化、伝統文化の伝承など、地域の課題を住民が主体的に解決する取り組みを提案する。

③ ①および②に要する経費を、基準財政需要



わがまちづくり支援事業



地域づくり生野塾＝兵庫県生野町
(上)参加者全員による旗揚げワークショップ
(下)グループ編成ワークショップ

額に算入する。

(2)わがまちづくり事業

①「わがまちづくりの提案」の内容は、ア・

住民が自ら行う事業、イ・住民と行政が協働で行う事業、ウ・行政に行ってもらいたい事業、が含まれると考えられる。

②このうちア・およびイ・に掲げる住民の発案を生かした住民の取り組みを市町村が支援する。

③②に要する経費を、基準財政需要額に算入する。

【想定される事業例】

・地域子育て事業

・高齢者福祉施設における交流事業

・世代交流イベント

・空店舗を活用したフリーマーケット

・特産品づくり

・伝統芸能踊りなど伝統文化の保存、伝承

・地域資源マップの作成

・地区史の作成・地区史を学ぶ会

・花壇づくりや地区の花木の選定・普及

・防災マップづくり

・安全・安心まちづくり

内容について若干の補足をしますと、

①事業費の七百五十億円程度については、地域（たとえば小学校区程度の広がりの場合）において、話し合いを実施し、わがまちづくり事業を展開する住民の皆さんの取り組みに對

し、市町村が支援するための経費として、全国所要額（七百五十億円程度）を積算しています。

②話し合いの場づくりとわがまちづくり事業の内訳についての考え方については、「話し合いの場づくり（に要する経費）」とは、住民がたとえば小学校区単位程度の広がりにおいて、話し合いを実施し、その結果を、「わがまちづくりの提案」としてとりまとめるまでの経費を市町村が支援する事業であり、「わがまちづくり事業」とは、「わがまちづくりの提案」のうち、ア・住民が自ら行う事業イ・住民と行政が協働で行う事業を市町村が支援するための経費です。

③話し合いの場づくりの経費としては、話し合いの実施に当たっては、住民参加における意見交換を行う小フォーラムの会場の借上料、他地域との情報交換のための旅費、各戸配布用のニュースペーパーの作成経費などのほか、話し合いの結果を冊子にとりまとめるための印刷製本費などをイメージしています。

また、インターネットなどを活用し、情報提供・交換を行うことが考えられ、そのためのパソコンの購入や維持管理費に充てることも想定しております。

3 地域づくり関連施策との連携について

「わがまちづくりの提案」の中の、ウ・行政に行ってもらいたい事業を受け、市町村が「住民の意向を反映した事業」や「住民と協働で行う事業」を実施する場合には、地域活力創出プランやふるさとづくり事業費などの活用が考えられます。

4 その他

(1)地域活性化センターとの連携により、次の事業を推進することとしていますので、市町村および地域づくり団体の皆さんの積極的な参加とご協力をお願いします。

①地域活性化センターのホームページに、「わがまちづくりコーナー」を新設



京都市における市民フォーラム

地域における取り組みの活発な市町村をリアルタイムで全国的に広報

②インターネット博覧会（インバク）への参加

新千年紀記念事業として開催されるインバクの自由参加パビリオンとして、わがまちづくり支援事業のモデルとなる特色ある事例を紹介するホームページ（パビリオン）を開設し、当該事業の周知を図るとともに、事例の投稿、意見交換の場所を設け、地域同士の交流・連携の機会を提供

③全国ふるさとづくり広報事業の活用

「笑顔がいちばん！」の中での取り上げと特別番組の企画

④わがまちづくりガイドブック（仮称）の作成

わがまちづくり推進の参考となるよう、事業の制度内容や先進事例などを掲載したガイドブックを作成

⑤その他

地域づくり団体全国研修交流会や情報誌でのPR

(2)「住民参加のまちづくり」自治大臣表彰関係「わがまちづくり支援事業」における住民の活動が活発に行われる市町村などについては、「住民参加のまちづくり」自治大臣表彰の候補とすることを検討していきます。

環太平洋地域における地域づくり調査研究

エコツーリズムが 地域を興し、 文化を伝える オーストラリアのフレーザー島に学ぶ

過密や労働ストレスに悩む都市住民にオアシスを提供し、過疎や高齢化で活力を失った農村に明るい風を吹き込む。このような観点から、農村体験やグリーンツーリズムが日本でも各地で実施されているが、今、新しい視点を取り入れたエコツーリズムが注目され始めている。そこでエコツーリズムの先進地オーストラリアの実状を現地で探るため、昨年十一月上旬、五日間にわたってクイーンズランド州ブリスベン市とフレーザー島を長友孝朗副参事らと共に訪問した。

オーストラリアでは現在、エコツーリズム業界が成長産業として脚光を浴びている。同国のエコツーリズムは、自然環境の維持に寄与しながら

観光を実施する「自然体験を通じて、環境への理解や評価、楽しさを得ることができる」「地域コミュニティへの寄与」「地域文化への配慮」などの条件を満たすことが求められている。とくに、地域社会への貢献としては、地元雇用、地元商品購入、地元産業の紹介、が挙げられる。そのほかにも地元学校の卒業生に就職の場を提供したり、便宜供与することなどが求められている。

世界最大の島といわれるフレーザー島では、環境リゾートとして、さまざまな工夫をこらしたエコツーリズムが展開されていた。島で食材などを使用するとき、できるだけ地元のものを使い、島のリゾート施設のスタッフ約三百五十人の多くは地

元から採用されている。この島が、地元にとって特別のすばらしい資源であることを一番よく理解しているのが地元住民である。だから、たとえウェーターとして働く場合でも、その理念を持って来島者と接することが重要であり、そういう認識の下で、施設の経営が行われている。

地域社会や地域文化の宣伝・促進に貢献しているのも地元の人びとである。たとえば、地元アボリジニ族のダンサーが伝統芸能を披露したり、来島の子供たちを対象にしたツアープログラムの中で、アボリジニの人びとと子供たちが一緒にブッシュの中に入り、その中で何を食べ、どのような生活をしていたかを見て回ったりするなど、子供たちと地元文化の接点となる役割を担っている。そのほかにも、スタッフがアボリジニ族の長老から、その文化を学ぶ機会が設けられている。

アボリジニは、筆記文化がなく、島の創造の伝説などもすべて口頭で伝えられている。その際、一言一句を決まった言葉で表現するため、ほんのわずかも省略して話をする、正式な伝説ではなくなる。そうした

ことから省くときには事前に断りを入れるなど、非常に気を使っているとのことだった。

オーストラリアでは、エコツーリズムの理念を取り入れた観光業が、地域活性化のなめになっっているというケースは数多く存在する。また、エコツーリズムのマネージメントの主体は、ほとんど民間業者であるが、地元住民によるボランティアや、コミュニティグループがプロデュースした事例もある。最近では、過疎化の進む二、三の地方自治体でエコツーリズム関係の計画を策定し、地域振興の原動力にしようとする動きも出てくる。

日本においては、エコツーリズムを普及していくうえで多くの課題があるが、地域住民の協力なしにこの事業は行えない。そのため地域への経済的波及効果の見込める仕組みづくりが不可欠であることを、この調査を通じて痛感した。



エコツーリズム協会を訪問。
左から2人目、ピーター・オルレイ会長、3人目が筆者

エコツーリズムとは、地域固有の自然・歴史・文化などの資源を生かし、それらの適切な管理に基づき保護・保全が図られ、かつ地域経済への波及効果が実現する観光である。

（財）地域活性化センター・コンサルタント業務課
副参事 菱川京子

奇跡の成長、五年間で売り上げ二倍に



（右）七城町特産品センター
メロンドーム支配人
福島隆次

置き、阿蘇がもたらす清らかな水によって、古くから良質の農産物に恵まれてきた地域である。

とくに米は、従来から「菊池米」として、県内では高い評価を得ていたが、数年前、東京のある業界紙が主催した米の食味会で、「七城の米」は、魚沼産コシヒカリなど並み居る銘柄を押さえて金賞を取ったほどの良質米の産地である。

売り上げの大部分は、独自に開発

した特産のメロンと新鮮な野菜。メロンは、生産者自らが売り場に立って、お客さんと直接、触れ合うスタイルが、結果として生産者自身の意欲を高め、お客さんの共感を生み、メロンドームの主力商品として売り上げを伸ばしてきた。

良質の「菊池米」産地

七城町は、雄大な阿蘇の山々の西北に広がる菊池平野のほぼ中央に位

ター出荷協議会」を組織した。同協議会には、メロン、花、野菜、加工品の部会を設け、計画作付け、出荷調整や値付けなどについて検討を重ねた。

また、主力商品となるメロンについては、現地指導や勉強会などの部会活動を通して、栽培技術の向上を図ったほか、地元の農家グループが品種改良に取り組み、特産品センターでしか買えない二種類のオリジナルメロンができた。

売り上げ10億円を突破

こうして、メロン型の屋根の七城町特産品センター、通称「メロンドーム」がオープンしたのが平成七年。メロンドームに並ぶ地元農産品や加工品の一つひとつには、生産者の名前が書かれたシールが貼られる。メロンの場合は、これに加えて生産者自身が売り場に立って、お客さんに試食していただく。もし、買っていた商品に問題があれば、お客さんから名指しでクレームが来る。メロンの最盛期には、メロン売り場は、生産者同士が声を張り上げてお客さんに声を掛ける。お客さんも、



道の駅メロンドーム

「あつちのメロンが甘い」「こっちのメロンがおいしい」と試食をしながら品定めをしたり、さながら戦場となる。

こうして、生産者が直接売場に立つ「対面販売」によ

って高まった商品に対する責任と競争の意識が、売り上げを、初年度の三億九千万円から、五年目の平成十一年度の十一億円にまで伸ばし、来店者も初年度の四十万人が十一年度には八十五万人強を数えた。

オープンから五年を経て、実はメロンドームは新たな展開を迎えている。地域産品の流通にも訪れた厳しい競争環境に対応するため、平成十一年、大幅なリニューアルを行ったのである。

まず、販売するメロンをはじめとした農産物の品質を高め、商品の競争力を高める基盤づくりを行った。

一つは、光センサー糖度測定装置を備えた選果ラインを設けたことである。光センサーによる糖度(甘み)測定は、果実に傷を付けることがないので、一個ごとの品質管理が可能。この結果、メロンドームには、一定の品質(糖度十四度)に満たないメロンは並ばないことになる。

もう一つは、メロンと並んで主力商品である、朝採り野菜などの品質保持のために保冷庫を設けたこと。これまでシーズンによっては、店頭と並べた商品がすぐに売り切れ、生産者は一日に何回もメロンドームまで納品に来る必要があった。メロンドーム自体に保冷庫ができれば、生



光センサー糖度測定装置を備えた選果ラインでおいしさ加減を電光表示板に掲示

産者の負担を軽くすることもできるのである。

加工品販売も強化

リニューアルのもう一つの目的は、加工品への対応の強化である。

メロン一個ごとの糖度を計ることによって、一定糖度以下のメロンは出荷(販売)しないことになる。裂果やサイズ

などの規格外品と合わせて、果汁を加工品に利用しようというのである。そのために、メロンドームの後背地に搾汁工場を建設。店内にもゼリー、アイスクリームなどの加工、販売スペースを設けた。すでに四種類のメロンゼリーのほか、パン、アイスクリームなどをメロンドーム内で生産、販売。さらに、果汁は原料としてメーカーに卸すことも視野に入れている。

実は、リニューアルを行った十一年秋、台風18号による暴風雨のため、本町の秋メロンはほぼ全滅。メロンドームの売り上げも大幅に落ち込み、リニューアル後の運営費も膨らんでいたため、一時は赤字も覚悟していたが、加工品などの売り上げ増で、何とかしのぐことができた。

そこで、加工品の取り組みが重要

になるのだが、そのポイントとなるのが加工原材料の確保だ。メロンの果汁は、本格的に作ると原料の規格外品の量が不足することが予測される。近い将来には加工用のメロンを作る必要があるになってくるわけだ。

新特産品づくりに挑戦

このように、売り上げとともに業



務や組織が大きくなることによって、さまざまな課題も出てくるが、メロンドームに対しては、わが七城町が取り組む「田園文化の里づくり」の拠点として、町内外からの期待は大きくなるばかりだ。

私たち、メロンドームの運営を預かる立場の者としては、単に施設運営だけを考えるだけでなく、町民とともに特産品づくりにチャレンジし、成功させることで、新たな意欲を高めていくべきであろう。

今後、これまで以上に、品質を高め維持することを基本に、「七城」の名前が、優れた商品の持つプラスイメージとともに知名度が高まるよう、生産、加工、販売が一体となった農業をベースとした産業づくりに取り組んでいきたい。

メロンドーム内



市町村実務研修レポート(上)

●関西(滋賀県)コース

情報発信し、 リピーター訪れる街に

地域通貨がメンバーを活性化

関西コースは、岡崎昌之主任講師を団長に、塾生十一人、センター事務局二人、総勢十四人が参加して、昨年十月三十一日、滋賀県長浜市からスタートした。まず、地域総合センター所長の辻川作男さんの案内で、曳山博物館を見学。重要無形文化財である「曳山まつり」を追体験した後、年間百九十万人が訪れるという「黒壁のまち」を散策。

株式会社黒壁は、ガラス工芸文化追求事業を軸に、北国街道を「ガラス街道」として復活させ、同時に、「世界の黒壁」ブランドの創出を目指し、欧州七カ国とガラス・ネットワークを結んでいる。社長として、まちづくりをリードしてきた笹原司朗さんは「まちづくりは三人のリーダーを集め、理念を持って活動を始めれば、おのずとコンセンサスは得られる。リピーターが訪れるまちづくりが重要であり、それには文化情報発信が必要」と熱っぽく語った。

二日目は、せせらぎ遊園のまちづくりをグラウンドワークの手法で推進する甲良町。当塾のOBでもある、まちづくり課の山田禎男さんから説明を受けた。集落ごとに、池や滝を取り入れた親水公園が設けられ、そこから集落内の水路に水が流されている。水路と民家の垣根とのゾーンには、住民の手で季節の草花がさりげなく飾られ、生活空間に「心地よさ」が演出されていたのが印象深かった。

午後から愛東町に移り、資源循環

●中国・四国コース

伝統文化を守ることが 魅力づくりに

まちづくりの主体は市民

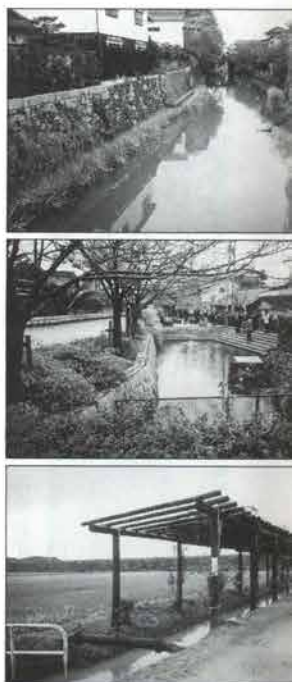
中国・四国コースは、昨年十月二十四日から二十九日までの四日間、宮口侗迪主任講師を団長に、塾生九人、センター事務局二人が参加、朝から晩まで、まちづくりに意欲を燃やす人たちとのふれあいの研修を行った。最初の研修先である岡山県赤坂町では、難波勉町長から「米を売る時代からご飯を売る時代へ」をキャッチフレーズに、第三セクター(株)赤坂天然ライスが展開している炊飯加工販売事業の説明を受けた。町内で生産されるほとんどの米を買い入れるこの事業は、町民に米づくり継続への安心感を与え、若者の流出を抑えるために主力農産物「米」に着目して創出された新しい産業であり、言わば、農業構造の改善を伴わない町

の活性化の事例である。備中松山城の城下町として栄えた高梁市では、歴史・文学・交流の三つの視点でまちづくりを実践している「高梁地域づくり交流会」の出会いを受けた。街並み保存運動のシンボルの拠点「観光物産館・紺屋川」を視察した後、武家屋敷町を訪ね、市民と共に取り組む街並み保存の現況にふれることができた。

平田重光助役を交えた懇談会では、会員のまちづくりへの対応と高梁の食文化を体感した。二日目は広島県に入り、尾道市のしまなみ交流館で「瀬戸内しまなみ大学」について村上明雄広域振興課



愛媛県内子町の「商いと暮らし博物館」を訪ねる



近江八幡市の「近隣景観協定による美しいまちづくり」
上から八幡堀、浅古井町、池田本町

システムに菜の花を組み入れ、観光とリサイクルの輪を広げる「イエロー菜の花プロジェクト」について、産業振興課の奥村清和さんと滋賀県環境生活協同組合理事長の藤井絢子さんから話をうかがった。環境問題は、頭で理解するのではなく、日常生活の中で実践し、心の奥底で理解しなければ、継続的な活動はできず、環境問題の重要性がよく理解できた。

三日目の近江八幡市では、「近隣景観協定による美しいまちづくり」がテーマ。同市職員の吉田正樹さんの案内で、「湧水と緑のあるまちづくり」浅古井町「安らぎのある農の里づくり」大中町「水と緑の風景を守り育てるまちづくり」八幡堀「四季の花咲く大樹の里のまちづくり」池田本町の四カ所で、地域住民一体となったまちづくりを地域リーダーの人たちからうかがった。その後、意見交換会を開き、総勢二十九人で大いに盛り上がった。

四日目は、地域通貨「おうみ」を

通じて地域活性化に挑戦する「草津コミュニティ支援センター」の活動状況を、スタッフの山口弘典さんと金沢恵美さんからうかがった。地域通貨とは、コミュニティが独自に発行し、ものや、サービスを特定の地域、グループ内で循環させ、市場では成り立ちえない価値を支えていく仕組みである。外部からのお金で経済的に潤うことだけが活性化ではなく、ちよつとした元気を提供し、相互交換していくことでコミュニティのメンバー一人ひとりが活性化するとこの言葉が強く印象に残った。

人と湖とのかかわりを通して、より良いコミュニケーション、ネットワークの場として、だれでも気軽に参加・交流できる「県立琵琶湖博物館」と、日本六古窯の一つ、信楽焼のテーマパーク「県立陶芸の森」を見学した後、塾生は貴重な体験を土産に、それぞれ帰路についた。

行森俊荘



広島県高宮町
企画課

長から説明を受けた。島々を分校に位置付けたユニークな発想が興味深く、「点を線で結び、そして面へ」を理想とした広域連携への取り組みが期待される。

平山郁夫画伯の出身地瀬戸田町では、柴田大三郎町長との座談会で地域資源を活用した人々呼び込む仕掛けづくりについて学んだ。その代表的なものが「平山郁夫美術館」であり、国産レモンの発祥地にふさわしい「シトラスパーク瀬戸田」である。

因島市では、「村上水軍陣太鼓保存会」との陣太鼓実演交流会を行った。この会は、村上水軍の真の姿をより多くの人びとに理解してもらうため、岡村俊典会長考案の陣太鼓を通してさまざまな場で活動している市民団体である。市内には、子供や女性だけの陣太鼓グループも結成され、陣太鼓による地域コミュニティの輪が広がっている。

三日目は愛媛県に入り、朝倉村にある「タオル美術館 A S A K U R A」を訪ねた。この美術館は、一広(柳)越智逸宏社長の本物へのこだわりが生んだ、タオル文化を楽しむながら学ぶことのできる観光工場であり、タオル文化の情報発信拠点としての進展が楽しみである。

丹原町にある「ちろりん農園」では、有機野菜と健康卵を契約消費者に直接配送するシステムを構築している経営者の西川則孝氏から、食べ物を通しての地域社会の在り方について講話をうかがった。

松山市では、地域リーダーの養成やまちづくり活動を支援している「働きあひめ地域政策研究センター」との交流会を行った。地域づくりリーダー育成研修生の萩森健氏と樽井優氏から地域資源を活用したまちづくり活動を発表してもらい、宮口先生が中心となつて「まちづくりの目的と手段の明確化」について議論した。

最終日の研修地、内子町では、木蠟の生産で栄えたころの面影を残す商家群や内子座を見学し、「八日市・護国町並保存センター」の岡田文淑氏から、二十数年前に始まった街並み保存や石畳地区での村並み保存の取り組みについて講話をうかがった。

「当然のことをやったら、結果として先進事例になっただけ」と語ってくれた中に、その土地ならではの伝統文化を守り続けることが地域の魅力づくりに繋がるといふ、まちづくりの本質を見いだしたような気がした。

成田幹雄



埼玉県加須市
まちづくり推進課

地域づくり団体探訪 平成かかしカーニバル実行委員会……………山梨県韮崎市



J A 梨北組合長賞の「ヤマンバ穂坂でぶどうがり」穂坂町育成会Aチーム

まちづくりの主役「かかし」登場 住民ら共同で製作・出品、産品も考案

高崎、大船とともに関東三観音に数えられる「平和観音」、鳳凰三山への登山コース途中にある「五色ヶ滝」、そして韮崎高校出身で、イタリア・セリエAで活躍するサッカーの中田英寿選手など、山梨県韮崎市の「地域資源」は数多い。

反対の 長老たちを説得

そんな中、田園風景で見慣れた「かかし」を韮崎市の地域資源の一つにつくり上げた団体がある。それが今回、紹介する「平成かかしカー

ニバル実行委員会」である。

設立は、事務局長の真壁静夫さんが、平成五年に世帯数五十戸の宇波円井区の公民館長に就任したのがきっかけだ。

当時の公民館活動は、皆無に等しい状態であった。なんとか地域を活性化させようと真壁さんは、他の公



事務局長の真壁さん

民館役員とともに各種組織の代表で構成される運営委員

会を発足させた。そして、親子映画会や健康教室を開催するなど、積極的に活動を展開したが、満足できるものではなかった。そこで、みんなで今一度、自分たちの住む地域について見直してみよう、ということになった。

当地も過疎化が進行し、農家の兼業化も進み、商業の発展性もない、ということ、公民館活動も人材育成など一般的な教養活動的なものだけでは、みんながついてこないだろう。子供たちが将来、当地に定住し

て親たちの跡を継ぐようにするには、もっと地域を活気づかせ、多くの人がこの韮崎市を訪れるように、何かイベントをやってはどうか、というのが大方の意見だった。

ところが、いざ、それを実行に移したところ、長老たちの間から「この地域には何も無いよ、あつたらとくに活用している。やつても無駄だ」という批判がわき起こった。真壁さんは「何にもないなら、新たに何かをつくり出せばいいんだ。どんな地域にも地域資源はあるのだから」と反発しつつも前向きで取り組む姿勢を打ち出した。

まず始めたのがイベントの題材探し。幸いにも、この地域はおいしいと評判の武川米の産地であり、全国三大堰ともいわれる徳島堰の源にも当たる。それらを生かす道はないかと考えられたのが、米所という地域特性である。それなら昔からお米を鳥獣から守ってきた「かかし」をテーマに試してみてもどうか、ということになった。

真壁さんは、こうした考えを長老たちに説明し、根気よく説得して回った。その結果、平成六年、ようやく実行委員会の立ち上げに成功、イベント開催に向け動き出すことができた。

関東のバスツアーも受け入れ

イベントの実施が決まったことで、住民は積極的にこれに協力、サッカーのラモス選手やアニメのセーラーMoonなど、当時の世相を反映した三十一体のかかしが、住民らの共同作業により製作・出展されたのである。会場の飾り付けや撤去も地元消防団が担当、まさに地域一体の取り組みとなった。

このイベントは、新たな地域産品を生み出した。その名は「かかし汁」。材料は、地域の名産つばら米を使った三分粥に、鳥肉のささみのみじん切りを入れ、色合いをよくするために人参とさやマメを入れ、醤油味でアレンジした。これを生み出すのに婦人会は何度も試作を重ねた。こうした努力の結晶が実ったのである。

試行錯誤を続けながら、イベントはこれまで順調に回を重ねてきたが、昨年開催された第七回大会は記念すべきものとなった。それは実行委員会が発足当初から夢に描いていた、東京近郊からのバスツアー受け入れ

が実現したのである。

かかしを展示する国道20号線沿いは、観光バスにとって周辺に見所もなく、カラオケで時間を費やすことから「カラオケ街道」と呼ばれ、長野県方面への通過道になっていた。

ところが、イベントの評判が高くなってきたことから、観光関係者からツアーバスの乗り入れ話が持ち込まれた。関係者の視察、綿密な打ち合わせが続いた後、ついにツアー受け入れが決定したのである。

ツアー会社から持ち込まれた計画は、バス二百台でツアー客約一万人。しかし、これを受け入れるには駐車場やトイレの問題をはじめ、解決しなければならぬ問題が数多くあった。中でも魅力ある農産品やおみやげ品を販売する売店をいかに確保するかが課題であった。そこで実行委員会では、新たに「かかしふれあい市組合」を設立した。

長嶋巨人や雪印牛乳も

組合の役割は、売店、駐車場の借り上げ、商品の仕入れ・販売、出店業者の募集など、イベントに伴う商

業活動であり、かかしの募集・管理などの実務的な面は従来どおり実行委員会が担当した。この組合方式を導入したこともあり、従来は八月下旬から三週間の開催期間が、一週間延長された。また、コンテストの表彰を行う大祭典日の一日のみ出店していた売店も、開催期間中ずっと出店されることになった。

主役のかかしも、読売ジャイアンツのペナントレース独走を記念して、長嶋茂雄監督のかかし、雪印の食中毒事件を受けた巨大牛乳瓶のかかしなど、世相を反映したおよそ二百十体のかかしが出品された。展示会場となった国道20号線沿いの田んぼでは、期間中多くの来訪者の笑い声で満ちあふれた。

前年の開催時に、地域の婦人グループが七十体作製・販売して好評だった「かかし人形」を、今度は五百体作製したところ、直ちに完売するほどの売れ行きだった。

このように、実行委員会をはじめ、多くの地域住民の協力により、初めてのバスツアー客の受け入れは大成功に終わった。

内容を刷新、リピーターに期待

今後の運営について真壁さんは次のことを考えている。まず一つは、出展作品の質を高めること。二つ目はかかし作りを通じて地域住民の生きがいづくりに結びつけること。三つ目は来訪者が多くなることで、交通対策など安全面での充実を図ること。四つ目は来訪者が、また訪れたいと思わせるようなイベントにすること、である。

イベント名に「平成」を入れたのは、かかしに対して単にノスタルジアを追求するのではなく、常に新しい感覚で時代に対応したい、という願いがこめられている。実行委員会のメンバーが、そのことを念頭に置き、企画内容の刷新・充実に努めていけば、これからも毎年、初秋の韮崎市は多くの人と、かかしで賑わうことだろう。

（地域活性化センター総務課 副参事 宮本明人）



かかし人形を作製、販売する婦人グループ

平成かかしカーニバル
実行委員会
プロジェクト

●設立年 平成六年四月 ●設立・運営主体 自主的組織・実行委員会
●代表者 高左右幹雄 ●会員数 七十二人
●事務局 韮崎市田野町下内井六四四

「北のよもぎ茶」と入浴剤が大ヒット 地域資源を生かした知恵の結晶

青森駅から竜飛崎方面へJRで約四十分、蓬田村に着く。総面積の八〇％は山林だが、古くから漁業、農業、酪農が盛んだ。中山山脈から流れる四本の川の豊かな農業用水を利用し、長い年月をかけて作り上げた美田が広がる。穏やかな陸奥湾のホタテ養殖が水産物水揚げ量の九〇％を占め、冬場は村営の牧場がスキー場に変身する。

好天の日は、正面に夏泊半島、北東に下北半島が一望できる。樹齢三百年以上の老松が美しい観光名所「玉松台」は、夏にはキャンプもでき、大勢の観光客で賑わう。隣接する「古城の沼」は整備が進み、松風の聞こえる静かなたたずまいをみせている。

豊かな村に商工会女性部
大自然に囲まれた、そんな蓬田村を舞台に、商工業の振興と取り組み、



活発に活動している女性グループが「蓬田村商工会女性部」。蓬田を心から愛し、村の活性化のために奮闘している部長の二唐美代子さん、副部長の佐藤礼子さんと、田中美美子さん、それに常任委員の小鹿悦子さんと、工藤サツエさん、事務局の八戸

緑さんに集まっていた、活動の様子をうかがった。

「蓬田村商工会女性部」は昭和五十五年十一月に設立されたので、今年で二十一年目になる。現在、部員は三十人。最初は男性のお手伝い程度で、これから何ができるんだろうと不安が先に立っていた」と二唐さんは設立当時を振り返る。部長を支える佐藤さん、田中さんは、そんな二唐さんを、「どつしりとした存在感と温かさがある、部員からの信頼は抜群」と評価すれば、

不安が先に立っていた」と二唐さんは設立当時を振り返る。部長を支える佐藤さん、田中さんは、そんな二唐さんを、「どつしりとした存在感と温かさがある、部員からの信頼は抜群」と評価すれば、

美容と健康をあなたに
「蓬田村商工会女性部」は、商工業振興を目的に、各種の講演会や研修

弘前市で生まれ育ち、三十八年前に蓬田に移り住んできた。今で言えど、当初は戸惑いもあったが、持ち前のバイタリティーで乗り越えてきた。村への思い入れも人一倍強く、活動にも熱が入る。「家業は刀鍛冶屋だけど、今は主人に任せ、私は女性部の仕事を中心。皆が協力的なのでやりがいがある」と楽しそうに話す。

八戸さんも「責任感と統率力があり、安心して仕事ができる」と信頼を寄せる。



商工会女性部の皆さん
(左から3人目が部長の二唐さん)

会の開催、「デュアスロンin蓬田大会」「玉松海まつり」「犬ぞりレース」など村のイベントをボランティアとして支えながら、むらおこしのための特産品開発など多岐にわたる活動を展開している。「いろんな地域資源を、部員のアイデアで特産品として開発・販売することができれば…」と二唐さんは熱っぽく語る。その中から大ヒットとなったのが「北のよもぎ茶」。二唐さんが健康のために続けていたよもぎ茶を、自宅でみんなにふるまったところ、まわりからぜひこれ売り出そうという話になった。



「北のよもぎ茶」と浴用剤の「北のぬぐもり」

シエよもぎた」や、青森駅構内および青森ベイエリアのランドマーク「青森県観光物産館アスパム」で販売しているが、広島、小倉、札幌、沖縄など全国各地で催した物産展でも大好評を博した。「蓬田はよもぎの里」のキャッチフレーズが、今では全国的に浸透しつつある。

次世代を小中学生に期待

続いて開発したのが、よもぎの葉の効用を生かした入浴剤。温かみのある青森弁を生かして「北のぬぐもり」と命名され、「北のよもぎ茶」と一緒に販売している。平成四年に、

村民の健康づくりを願ってオープンした「ふれあいセンターよもぎ温泉」にも、この「北のぬぐもり」が使用されている。よもぎが血液の循環を促進し、湯冷めしにくいと言われることから、村民のみならず観光客にも親しまれている。

「北のよもぎ茶」と「北のぬぐもり」で、年間約二十万円の売り上げがあり、女性部にとっては貴重な活動資金となっている。

「村おこしはどこでも行われているが、それを効果あらしめるのは販売にかける意気込みと、ちよつとした工夫の問題」と事務局の八戸さんは語る。

その「蓬田村商工会女性部」にも悩みはある。「村の人口が減少し、高齢化が進んでいるので、先行きがやや不安」という二唐さん。その心配を吹き飛ばすには人づくりが緊急の課題だ。次世代を育てるため、女性部が主体的に取り組んできた海岸清掃のボランティアに、将来を見据えて小中学生まで参加させ、すそ野を広げているのもそのためだ。

明るく、バイタリティーにあふれる二唐さんたちに将来の夢を語ってもらった。

「蓬田村は季節ごとに楽しみ方があるので、この地域資源を生かして、一年中、観光客で賑わうようにしたい」「よもぎは健胃、分秘促進作用があり、健康増進に効用があるといわれる。次は独自のよもぎ酒を開発してみたい」など。

将来の夢は女性パワーで

地域間交流にも前向きに取り組んでいる。津軽海峡を挟んだ九町村による商工会主催の合同産業展が昨年十年目を迎えた。青森から函館まで、将来の新幹線開通を目指し、民間の交流は青函を越え、手を携えている。「私たちの活動がきっかけになって、村の商工業が発達していけば、仕事も増えて人手も必要になる。国道280号線バイパスが開通すれば、アクセスもさらに良くなり、観光客だけでなくUJターナーなどで村の人口を増やすことも夢ではない。そんな活気にあふれる蓬田村を女性の力で実現したい」と皆さん、そろって明るく話してくれた。

「蓬田村商工会女性部」の前途は、女性のパワーと熱意で、蓬田の青い海と玉松台に広がる澄んだ空のように明るく輝いている。

(助)地域活性化センター研修交流課
副参事 木村隆広

自然と人との共生を議論

性化の取り組み状況
を報告されるなど、型にはまらない

熱気溢れた

小さな

全国フォーラム



静岡県副知事
柴順三郎

および南硫黄島（東京都）が指定されている。

昨秋、北海道羅臼町で開催された「全国原生自然環境保全フォーラム in らうす」に出席する機会を得た。

「原生自然環境保全地域」は、わが国に残された原生的自然を保全するため、自然環境保全法に基づき、全国で五地域、つまり遠音別岳（北海道）、十勝川源流部（同）、大井川源流部（静岡県）、屋久島（鹿児島県）

このフォーラムは、これら保全地域を有する自治体関係者が一堂に集まって交流を深め、自然環境の保全や地域資源を生かした活性化策などを話し合う場として、一昨年秋、本州で唯一の指定地域を持つ静岡県本川根町の鈴木敏夫町長の呼び掛けで始められた。一回目は本川根町で開催され、今回は二回目である。

「全国」と名の付くフォーラムとしては、おそらく日本一小さな規模かもしれないが、その内容はどんなに大きな全国大会にも劣らない熱気に満ちあふれたものだった。

「原生自然環境とエコツーリズム」と題した北海道大学環境科学研究所の小野有五教授の基調講演に始まり、「自然と人との共生」をテーマとしたパネルディスカッションと続いたが、途中、国際環境ジャーナリストの今泉みね子さんが飛び入りで、ドイツのある村におけるコウノトリの営巣保護と地域活



性化の取り組み状況を報告されるなど、型にはまらない手づくりのフォーラムであった。終始、自然した議論が展開されたが、とくに、地元の辻中義一・羅臼町長、牛来昌・斜里町長をはじめ、指定地域を持つ町村長の自然環境保全と地域活性化への近況報告は、ユニークでユーモアを交えたものであった。

「この自然を守り抜こう」という共通した強い意気込みには参加者一同、胸をうたれた。

現地視察を含めた二日間のフォーラムでは、自然環境を保全しつつ、自然と共により豊かに暮らすにはどうしたらいいか、すなわち「自然と人との共生」の問題が一貫して議論された。たとえば、自然環境の保全と観光客を中心とする交流の拡大は、裏腹でもあり、保全地域と利用地域間の緩衝地域の設置や、地元ガイドの同行などルールづくりの必要性なども指摘された。

自然と人との共生は原生自然環境保全地域指定の有無とはかわりなく、今後とも大きな課題となるであろうが、各地域の住民が、自然の重要性に気付き、それを誇りとして、今回のフォーラムのような取り組み

全国原生自然環境保全フォーラム in らうす

を辛抱強く継続していけば、必ず解決の道は見いだされるであろう。

現在では、バーチャルリアリティにより、過去にさかのぼって、原生の世界を疑似体験することは可能であるが、今後、IT革命がどんなに進もうとも、私たちは本物の自然に触れてこそ、その幾千万年余の歴史の重みと共に、その微妙な息づかいをも「実体感」できるのである。

今回のフォーラムに参加し、知床半島の美しい自然と、そこに住む親切でやさしい多くの人びとと出会うことができた。「美しい自然がやさしい人を育て、やさしい人びとが美しい自然を守り、育てている」ことを確認することができ、この限られた自然を後世に引き継ぐ必要性をより一層痛感した。

今回のフォーラムは、世界自然遺産に登録されている鹿児島県屋久島での開催が決定し、その次は大雪山の麓、北海道新得町が名乗りを上げている。

静岡県の小さな町の呼び掛けで芽生えた幼いつぼみが、小さな村や町の心やさしい人びとの熱意によって、大輪の花を咲かせようとしている。そんな期待を抱かせてくれるフォーラムであった。

地域 だより

工場群を観光資源に活用 「鉄のまち」北海道室蘭市

鉄鋼業界の長引く不況の中で、鉄のまち、北海道室蘭市は、工場群を観光資源に活用する「産業観光」によって、まちの活性化を図ろうとしている。

昨年九月中旬、光と産業をテーマにしたイベント「スワンフェスタ2000」で、市とNPO法人、室蘭地域再生工場が工場見学ツアーを企画した。定員百六十人に、道内各地から四百七十人が応募、定員枠を三百人に拡大して、新日鉄室蘭製鉄所、日本製鋼所室蘭製作所、日石三菱精製室蘭精油所の三カ所の工場、歴史的建造物の瑞泉閣などを、一日がかりで見学した。

同市の観光客は、市内の白

鳥大橋が開通した九八年度の二百六万人から、九九年度は百七十五万人に減り、今年度も減少する見通しだ、という。そこで、窮余の一策として浮上したのが工業と観光を結び付けた「産業観光」である。参加者のアンケート調査では、「満足」「やや満足」が八割を超え、市総合政策室では「二回目への足掛かりができた。次回は民間ベースでつくるツアーを市が側面から支援する



右日本製鋼所室蘭製作所（発電所）
左新日鉄室蘭製鉄所（棒鋼工場）

形をとりた」と語っている。

福岡、下関市と 釜山市が連携

福岡市は昨年秋、韓国釜山市との間で日韓両国語による共通の観光ガイドブックを刊行し、東京で共同観光説明会を開くなど、両市一体で観光客誘致に乗り出している。今年、ソウル市でも共同説明会を開く予定で、両国の首都圏からの観光客動員をねらう。具体的には今後、旅行会社などへの働き掛けを行う。日本と外国の都市が一緒になつて観光客誘致を図るのは初めてという。

一方、下関市では、中心部の竹崎町から長門町、上条町へ続く商店街を「コリアタウン」と命名し、韓国からの観光客誘致に結び付けたいとしている。商店街側から、市側にそのための申請が出されているが、具体的に何を行うかは今後、検討していく。

中心街再生「蔵」活用し、 落語会

山形県大石田町の最上川沿いにある「まるいの蔵」で、



昨年十二月三日、落語会が開かれた。山形新幹線延伸一周を記念しつつ、同町の歴史的資源である蔵を活用することで、まちの再生につなげよう、とのねらいがある。かつて最上川の舟運で栄えた同町には、数多くの古蔵があり、町の中心部にある「まるいの蔵」は町が所有者から無償で取得、二百万円をかけて補修した。

新幹線が一昨年十二月、新庄まで延伸されてから観光客も増えており、町では蔵を中心街の顔にして、町を活性化させたい、としている。この日は、若手落語家の三遊亭新潟と林家彦いち、演芸の翁家勝丸さんが得意芸を披露し、満員の会場を沸かせた。

四月に東京で 「旅フェア2001」

新世紀の幕開けとなる記念

すべき節目の年に、第七回旅の総合見本市「旅フェア2001」が四月二十日から二十二日までの三日間、東京都江東区のお台場エリアにあるコンベンション施設「東京ビッグサイト」で開催される。

「体感！新時代、日本の旅」を開催テーマに、全地方団体や運輸機関、旅行会社、観光・宿泊施設などが参加し、新時代に向けた個性的で魅力あふれる全国の旅情報と、新しい日本の旅のスタイルを、ブース展示やステージでのプレゼンテーションにより紹介する。毎年、約二十五万人の来場者を迎える国際的にも比類のない大規模な旅のイベントで、各地の伝統芸能、有名ゲストによるアトラクション、トークショーなどを予定している。そのほかにも全国各地の名物や駅弁などが味わえる「グルメコーナー」、日本の「食」「匠」を実感していただく「旅の実演・体験コーナー」、次代の旅で活用されるIT系産業の情報コーナー「旅のITインフォメーション」

なども開催される。入場料は無料。問い合わせは旅フェア実行委員会事務局（☎〇三ー三二八七ー〇〇八六）まで。

「コミュニティ政策学会」設立へ！近く発起人会

学界、自治体などの間で、二十一世紀はコミュニティ型社会になるのを想定して、「コミュニティ政策学会」を設立する動きが出ており、できれば今春にも発起人会をつくり、来年春にも発足させたい意向である。

コミュニティに関しては、各大学の研究も学部ごとにばらばらに行われて整合性がなく、自治体の間でもコミュニティ活動は活発ではあっても、その方向性や展望が明確でない、という認識が関係者の間にある。

このため、コミュニティ問題の権威である愛知学泉大学コミュニティ政策学部長の田実教授らが中心となって、学界、自治体などに呼び掛けて、大学での理論的なコミュニティ研究と、自治体での実践的なコミュニティ活動とに

整合性を持たせ、方向付けする作業を行うことにした。学界では、岐阜経済大学、大谷女子大学、愛知学泉大学などが、すでに参加の意向であり、自治体でも兵庫県宝塚市が呼び掛け人となって活動を始めている。

自治会、町内会など旧来からのコミュニティに加え、宝塚市では小学校区を単位にした「まちづくり協議会」という新たな仕組みのコミュニティをつくっており、東京都三鷹市でも政策提言のための市民会議的なコミュニティが活発に活動している。

コミュニティづくりのための学会は珍しいという。

第5回地域活性化フォーラム

パートナーシップによるまちづくり
共に生きる地域社会をめざして

すべての人がいきいきと生活し、人と人との交流が深まる地域社会を実現するためには、高齢者、障害者をはじめ、女性や子供、外国人などすべての人にやさしいまちづくりを推進する必要があります。そのためには、住民、NPO、民間企業、行政などさまざまな主体がパートナーシップを組み、それぞれが適切な役割を分担することが必要です。本フォーラムは、このような地域社会を実現するために、「パートナーシップによるまちづくり」の考えを浸透させることを目的として開催するものです。ぜひご参加ください。

- 開催日時 平成13年3月11日(日)13:00~17:00
- 開催場所 有楽町朝日ホール
- 出演者 講演：マリ・クリスティヌ(異文化コミュニケーションーター)
- パネルディスカッション： 卯月盛夫(早稲田大学教授) 清原慶子(みたち市民プラン21共同代表、東京工科大学教授) 白石真澄(ニッセイ基礎研究所主任研究員) 平岡啓輔(熊本県宮原町長) マリ・クリスティヌ(異文化コミュニケーションーター)
- 参加料 無料

問い合わせ先
財地域活性化センター 情報サービス課
TEL03-5202-6135 FAX03-5202-0755

「センター」通信

アドバイザー事業 希望団体を募集

（財）地域活性化センターでは、平成十三年度の「地域づくりアドバイザー事業」の希望団体を募集しています。

同事業は市町村などが取り組む①地域の総合診断、計画策定②観光資源の整備、特産品の開発、商店街の活性化③イベントの実施、文化施設の整備④国際交流などの地域づくり活動に適切な助言を行う

専門家を紹介、その受け入れにかかわる経費の一部を助成するものです。

事業枠は四十団体。希望団体は都道府県を通じて二月十六日(金)までに申し込んでください。

- 申し込み先 Ⅱ
コンサルタント業務課
☎〇三ー五二〇二一六二三八

コンサル事業 申し込み受付中

（財）地域活性化センターでは、地方公共団体が調査、策定する①総合、広域都市計画②地域振興計画③商店街振興計画④観光・リゾート計画⑤保健・福祉計画などについて、

受託や専門家の紹介、あつ旋を行っています。活用してください。

- 問い合わせ先 Ⅱ
コンサルタント業務課
☎〇三ー五二〇二一六二三八

首長来訪

- ▼富山県山田村 山崎吉一村長(12月5日)
- ▼石川県能都町 持木一茂町長(12月7日)

笑顔がいちばん！放送予定

- 2月4日 栃木県日光市、河内町世界遺産 日光の社寺
- 2月11日 広島県吉和村、神石町発見・体験・交流！ふれあい空間の創造
- 2月18日 山梨県南部町、早川町内船歌舞伎の夕べ
- 2月25日 高知県伊野町、愛知県名古屋市長宮崎県南郷村
- 全国ふるさとめぐりイベント大賞！

TBS系、毎週日曜日
午前7時~午前7時30分
*一部放送日時が異なる地域があります。

風、踊る。



南国土佐の夏を代表するイベント「よさこい祭り」
 強烈なリズムと自由奔放な踊りは
 若者たちを中心に多くの人々の心を捉え
 らしめる「YOSAKOIソーラン祭り」を始め全国各地で
 よさこいの名を冠する祭りが生まれてきている
 本誌・土佐の「よさこい祭り」は
 毎年8月9日から12日まで、高知市で行われ
 県内外約1万4千人の踊り子が乱舞する

高知県



日本一の総ひのき木造校舎

滋賀県甲良町は、琵琶湖の東部、湖東平野に位置する平坦な農村。

そこに、ちょっとステキな図書館がある。

甲良の先人が、昭和のはじめに建築した総ひのき造りの木造校舎。

第二の国民の宮殿として建築されたものと絶賛され、そのことは、子から孫へと引き継がれ、

「日本一の木造校舎」として地域の誇りそのものであった。

時代は変わり、新しい学校建築のため、平成5年、この校舎が解体されることとなったが、その魂は健在で、町は文化財として保存。

しかも、見る文化財ではなく、使う文化財。町立図書館、歴史資料館として、

まさに「学び舎」として、今生きる人のみならず、次世代へと確かなメッセージを送り続けている。

ひのきの香りと共に……。

【学び舎】



2月イベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

2月7日～9日
北条市（愛媛県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

2月13日～22日
中国5県物産観光協議会

2月26日～3月2日
函館市（北海道）



12月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

12月4日～6日
東村（福島県）
東村特産品物産展①

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

12月4日～8日
木頭村（徳島県）
木頭村ゆずまつり②

12月11日～14日
吉野熊野地域振興協議会（和歌山県）
吉野熊野写真展

12月18日～28日
只見町（福島県）
会津只見町ふるさと産品「手作り木工品」展示即売会③

■編集後記

▼「ナンバーワン」にこだわるのは、古今東西を通じて変わらないようである。外国人なら、誇らしげに人差し指を一本突き出す風景をよく見かけるが、威張り散らしているようで、あまり格好いいものではない。

日本人が一番なろうと頑張るのは、努力の成果をみんなに知ってもらいたいという気持ちが強いのと、社会生活において、プラスの影響が大きいからであろう。「日本一」をバックボーンに、まちづくりを進める市町村があつて当たり前。今月号は、そうした市町村を取り上げた。

▼トピックス欄で紹介した、開館して五年目に売り上げが三倍に増えた、という熊本県七城町の特産品センター「メロンドーム」のサクセスストーリーは、自治体にとって参考になるのではなかろうか。人口六千の町が成し遂げた、まさに「平成の奇跡」といってよい。

▼二十一世紀は、科学技術の分野がさらに進化する一方で、自然と人間との共生、人と人とがふれあうような「心の時代」になるだろう、と言われている。人びとは、感性をみがき、心のゆとりが求められる。地域づくりにおいても、そうした視点を忘れてはならない。

（なべ）

●3月号予告
特集Ⅱ 地域づくり自治大臣表彰

地域づくり2月号

平成13年2月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社

スウーピーな夢、いろいろ

2億・3億円を手にするかも知れないジャンボ宝くじ。

数字を選んで当てるナンバーズやミニロト、ロト6。

すばやく当たりがわかるインスタントくじ。

夢をコツコツ楽しむ100円くじや

季節ごとの名前がついた宝くじ、などなど……。

より多くの方の心に、もっといろんな夢を。

そんな願いから宝くじの種類も楽しさも多岐に広がってきています。

そして、21世紀。

宝くじが目指す粒よりの夢たちにどうぞご期待ください。

宝くじの収益金は、身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団
法人

日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。